

A yellow shipping container is being lifted by a large forklift in an outdoor yard. The container has "USN 2262" and "6114" printed on it. The background shows a cloudy sky and other containers in the distance.

Cloud Computing から Cloud Native への潮流

さくらインターネット株式会社
クラウド事業本部
前佛雅人 @zembutsu
2021年10月25日



ZEMBUTSU Masahito

前佛 雅人



@zembutsu

@zembutsu_works



zembutsu

さくらインターネット株式会社 クラウド事業本部
Technology Evangelist / Developer Advocate

- ホスティング・ISP事業者のサポートおよび保守としてキャリアをスタート
- 興味範囲: 運用監視、自動化、オープンソース関連技術の調査・翻訳、プログラミング教育
- 最近の趣味: ランニング、料理

私は何をしたいの?: 情報処理技術者ではない普通の人が、当たり前計算資源を活用し、豊かな生活を育めるように支援する



<https://docs.docker.jp/>



Cloud Computing から Cloud Native への潮流

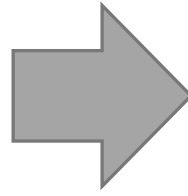
- 日本における「**Cloud Computing**」認知から10年、改めてクラウドを問う
 - ・ ビジネスチャンス先行のための手段（例：コロナ禍で強いられるクラウド対応）
- 「**Cloud Native**」導入には、しかるべき道順(Trail)がある
 - ・ スケール可能なサービス※実現に、**コンテナ化** → CI/CD → オーケストレーション

※広義の”サービスとしてのソフトウェア”
- 「**Docker**」や「**コンテナ**」とは？ & Hacobune(β) ご紹介

Cloud Computing

クラウド
移行

Cloud Migration



クラウド
ネイティブ

Cloud Native

- データセンタが提供するインフラサービスは、物理サーバから仮想化、そしてクラウドコンピューティングへと変わりつつあります。
- 近年は新しい要素としてコンテナ技術が注目を集めています。

NATIONAL BESTSELLER

THE Nicholas Carr
AUTHOR OF *THE SHALLOWS*
BIG SWITCH

"COMPULSIVELY READABLE." —*FAST COMPANY*



REWIRING THE WORLD
**FROM EDISON
TO GOOGLE**

THE DEFINITIVE GUIDE TO THE
CLOUD COMPUTING REVOLUTION

WITH A NEW AFTERWORD

The Big Switch: Rewriting the world, From Edition to Google



- 20世紀の「電力会社」のように、インターネットを通じたクラウドコンピューティング
- Nicholas G. Carr
- 2008年1月発売(邦訳10月発売)
- 翔泳社





電力会社(20世紀初頭)の例え

巨大電力
ネットワーク

ELECTRIC GRID

- ・発電設備
- ・送電設備
- ・保守



- ・電力網を通じた
家電の普及・利用
- ・豊かな生活

クラウド
コンピュー
ティング

COMPUTING GRID

- ・サーバ設備(計算)
- ・ネットワーク設備
- ・保守



- ・スマートフォンを通じた
アプリやサービスの
普及・利用
- ・豊かな生活

クラウドは特別な存在ではなくなった



- 個々のマシンやデータセンタ上のサーバにデータを持ち、システムを動かす時代の終焉を予測
- ただし、1つのマシン(One Machine)に集約されるのではなく、分散した

<http://www.rough.type.com/?p=8314>

仮想化からクラウド・ネイティブへ

From Virtualization to Cloud Native

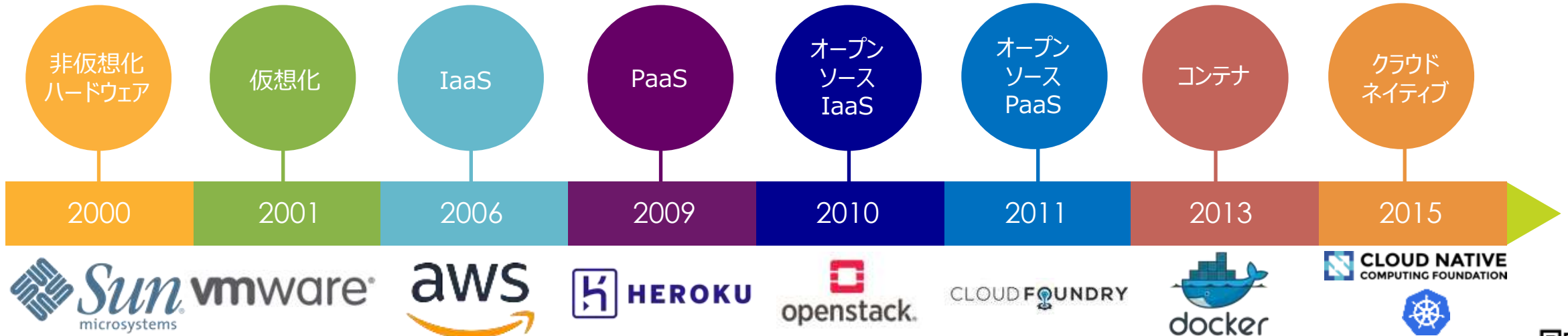


CLOUD NATIVE
COMPUTING FOUNDATION



kubernetes

- ・クラウド・ネイティブ・コンピューティングはオープンソースのソフトウェアを積み重ね、次のために用います：
 - アプリケーションをマイクロサービス(*microservices*)に分割し、
 - 各パーツ自身をコンテナにパッケージし、
 - リソース利用を最適化するために、動的に統合 / オーケストレーション(*orchestrate*)する



“ペット vs 家畜”

Pattern: Scale-out, not UP

Scale Up: (Virtual*)
Servers are like pets



garfield.company.com

You name them
and when they get
sick, you nurse
them back to
health

Scale Out: (Virtual*)
Servers are like cattle



web001.company.com

You number them
and when they get
sick, you shoot
them



attrib: Bill Baker, Distinguished Engineer, Microsoft
* added by yours truly ...

19

cloudscaling

Cloud Native Computing Foundation (CNCF)

ベンダロックイン無くクラウドを移動できるように



**CLOUD NATIVE
COMPUTING FOUNDATION**

2015年設立 ↑ プロジェクトを支援



2000年設立。Linuxを中心としたオープンソースのエコシステムを築くため、コンピュータ業界を中心に自動車業界など、50以上のサブプロジェクトを持つ。幅広く業界との調整や標準化のために努める非営利団体。

オープンソースのソフトウェアを積み重ねて:

- コンテナ化

アプリケーションやプロセス等の各部分をコンテナ内にパッケージ化し、再利用性、透明性、リソースを分離

- 動的なオーケストレーション

コンテナを活発にスケジュールし、リソース利用率の最適化を管理

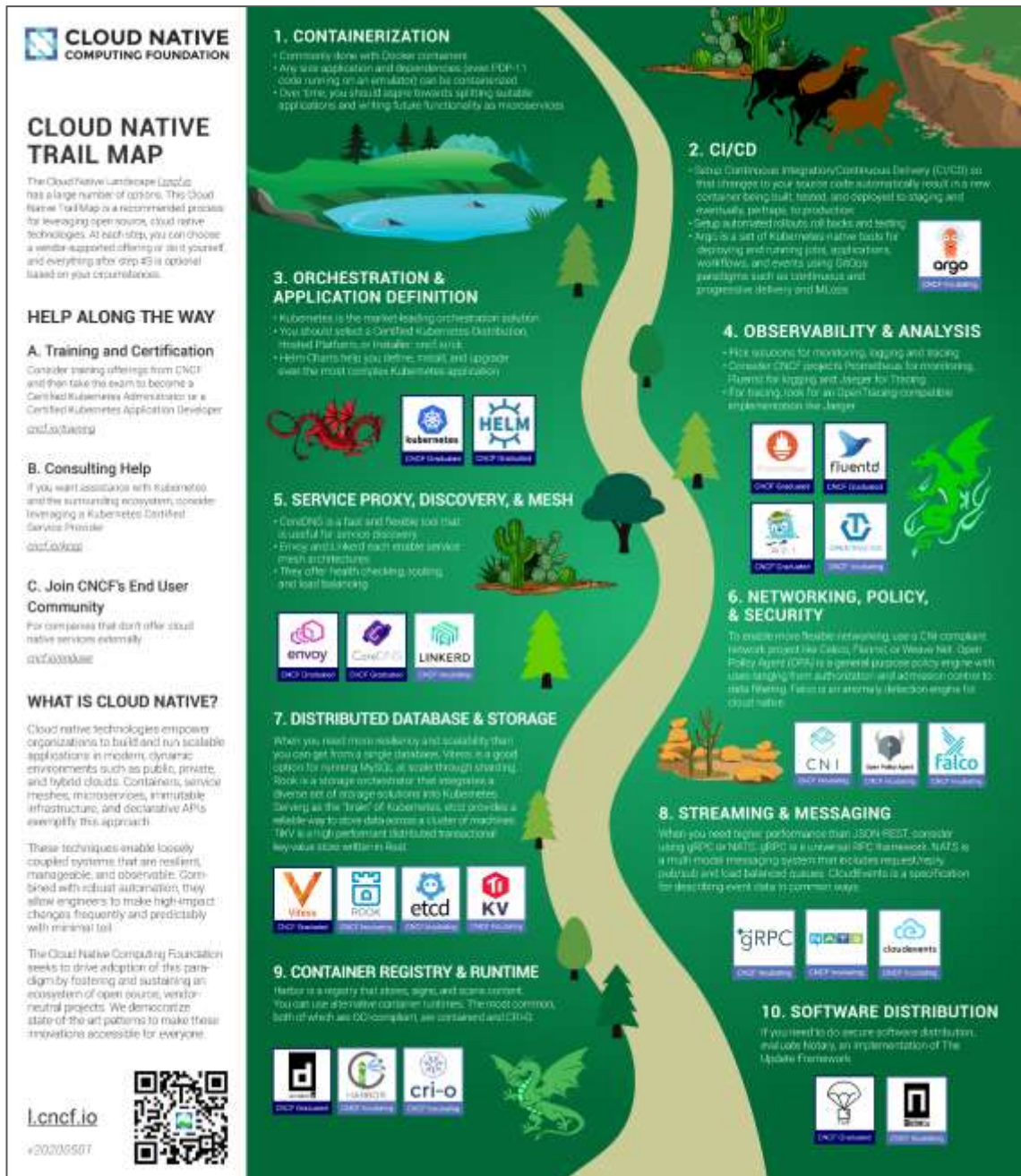
- マイクロサービス指向

アプリケーションをマイクロサービスに分割し、全体的な敏捷性(agility)とメンテナンス性を極めて向上

TRAILMAP

コンテナやマイクロサービスのようなクラウドネイティブ技術は、組織が開発とデプロイをスケラブルに、アジャイル・アプリケーションとサービスを動的に、かつ分散環境で行えるようになります。これらの特長の考慮した設計のシステムであれば、回復力のある(resilient)、弾力的(elastic)で、疎結合(loosely coupled)となり、管理可能な抽象化と宣言型の API を通すので、つまり、効率的で信頼性のある自動化をもたらすのです。これにより、エンジニアはアプリケーションを監視できたり、影響の大きな変更も簡単に行えたりします。そして**プロセスとワークフローは結果的に、これらの環境を最大限に活かし、苦痛を最小化するのです。**

<https://github.com/cncf/trailmap>



1. CONTAINERIZATION

- Commonly done with Docker containers
- Any size application and dependencies (even PDP-11 code running on an emulator) can be containerized
- Over time, you should aspire towards splitting suitable applications and writing future functionality as microservices

3. ORCHESTRATION & APPLICATION DEFINITION

- Kubernetes is the market-leading orchestration solution
- You should select a Certified Kubernetes Distribution, Hosted Platform, or Installer: cncf.io/ck
- Helm Charts help you define, install, and upgrade even the most complex Kubernetes application



2. CI/CD

- Setup Continuous Integration/Continuous Delivery (CI/CD) so that changes to your source code automatically result in a new container being built, tested, and deployed to staging and eventually, perhaps, to production
- Setup automated rollouts, roll backs and testing
- Argo is a set of Kubernetes-native tools for deploying and running jobs, applications, workflows, and events using GitOps paradigms such as continuous and progressive delivery and MLOps



4. OBSERVABILITY & ANALYSIS

- Pick solutions for monitoring, logging and tracing
- Consider CNCF projects Prometheus for monitoring, Fluentd for logging and Jaeger for Tracing
- For tracing, look for an OpenTracing-compatible implementation like Jaeger



1. コンテナ化

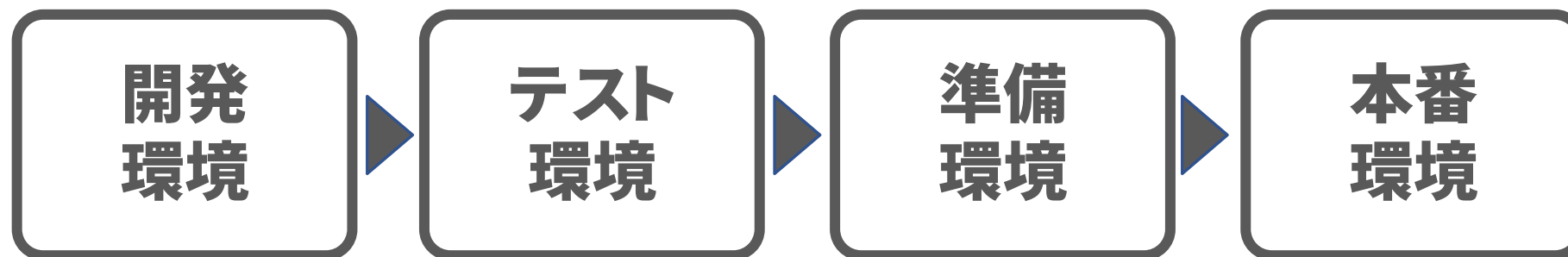
- 一般的にDocker コンテナを使う。
- あらゆる大きさのアプリケーションと依存関係を（エミュレータ上で実行する PDP-11 のコードですら）コンテナ化できる。
- 時間がたてば、適切なアプリケーションの分割を求めるようになり、次世代の機能をマイクロサービスとして書くでしょう。

CONTAINERIZATION

Commonly done with Docker containers

any size application and dependencies (even PDP-11 code running on an emulator) can be containerized
over time, you should aspire towards splitting suitable applications and writing future functionality as microse





サービスを
提供したい

アプリを
動かしたい

課題 都度、環境構築

課題 異なるOS環境

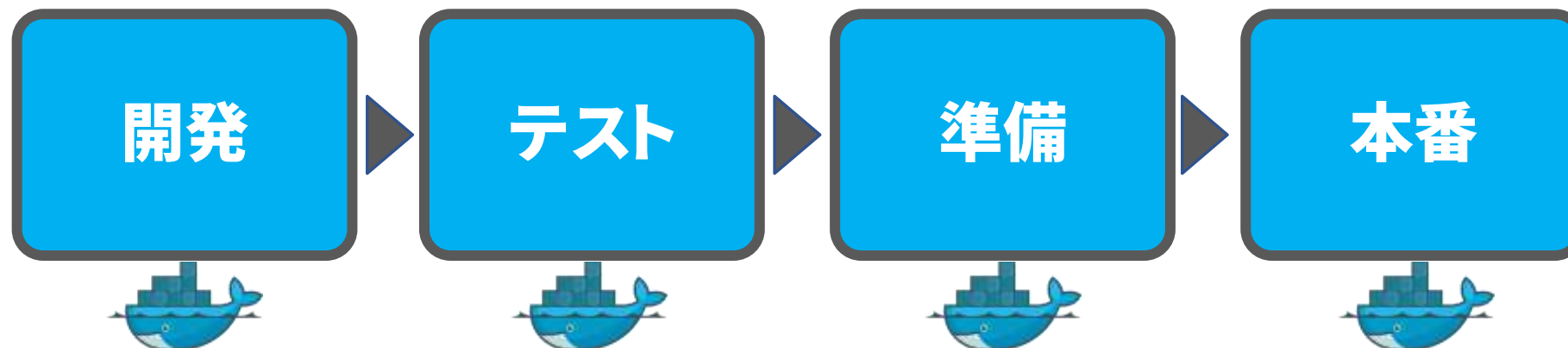
課題 都度、プロビジョニング

課題 動かない

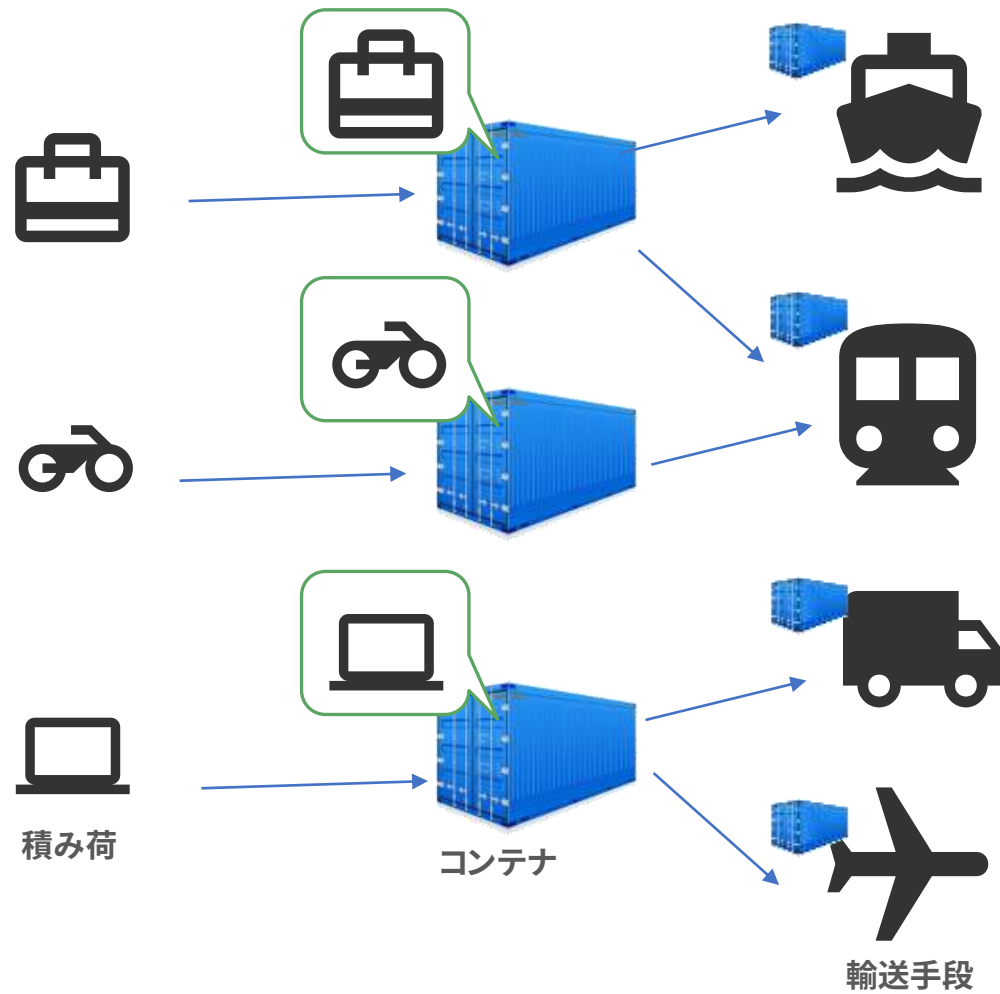
課題 時間がかかる

課題 遅い

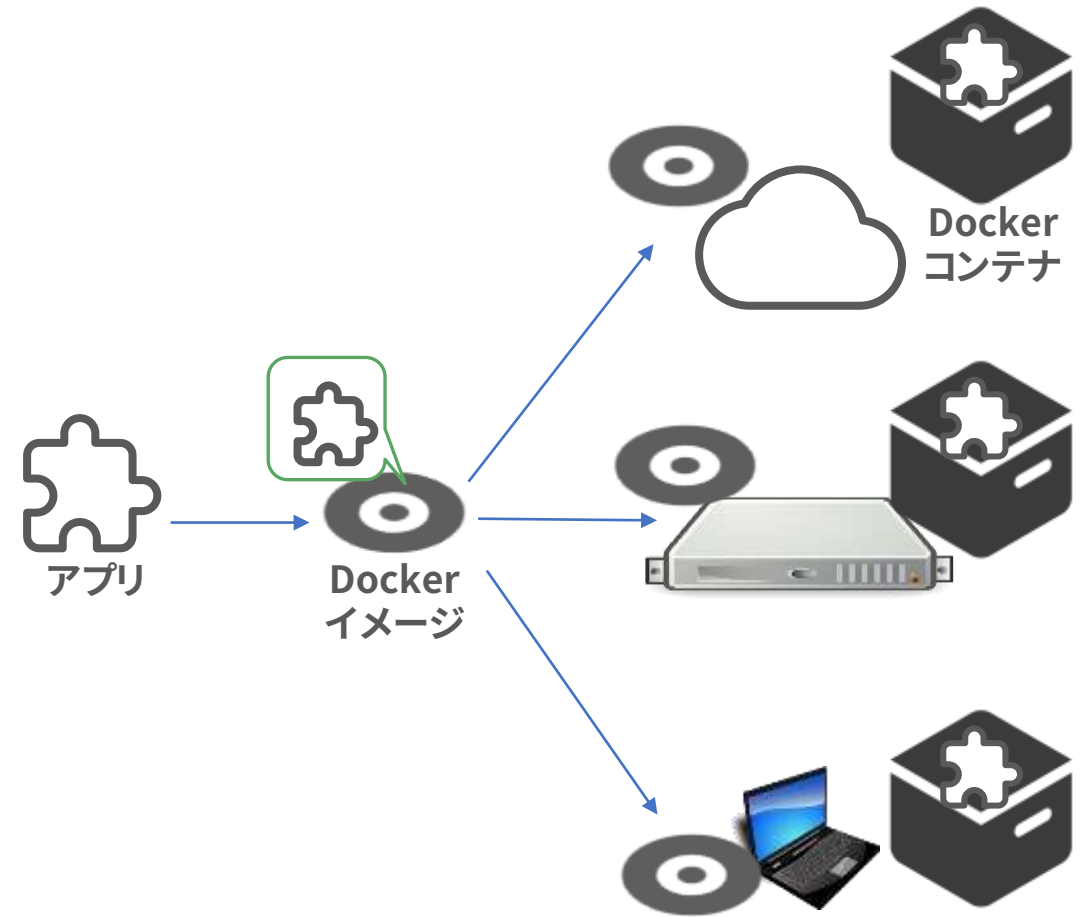
課題 面倒



どちらも「中身」を気にせず輸送・移動できる



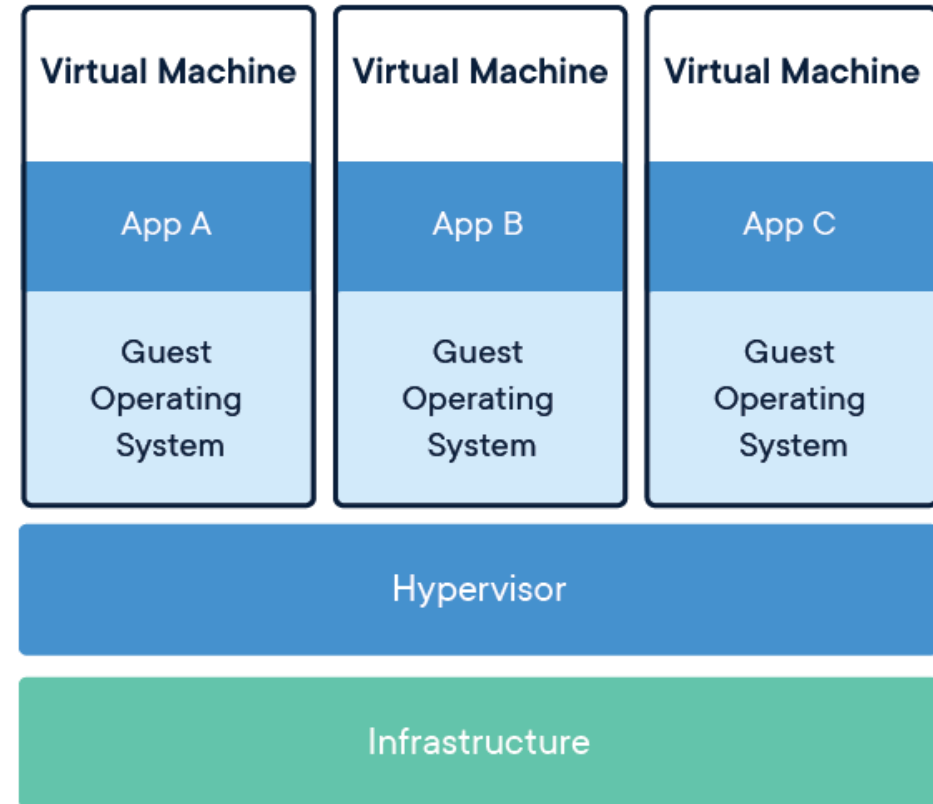
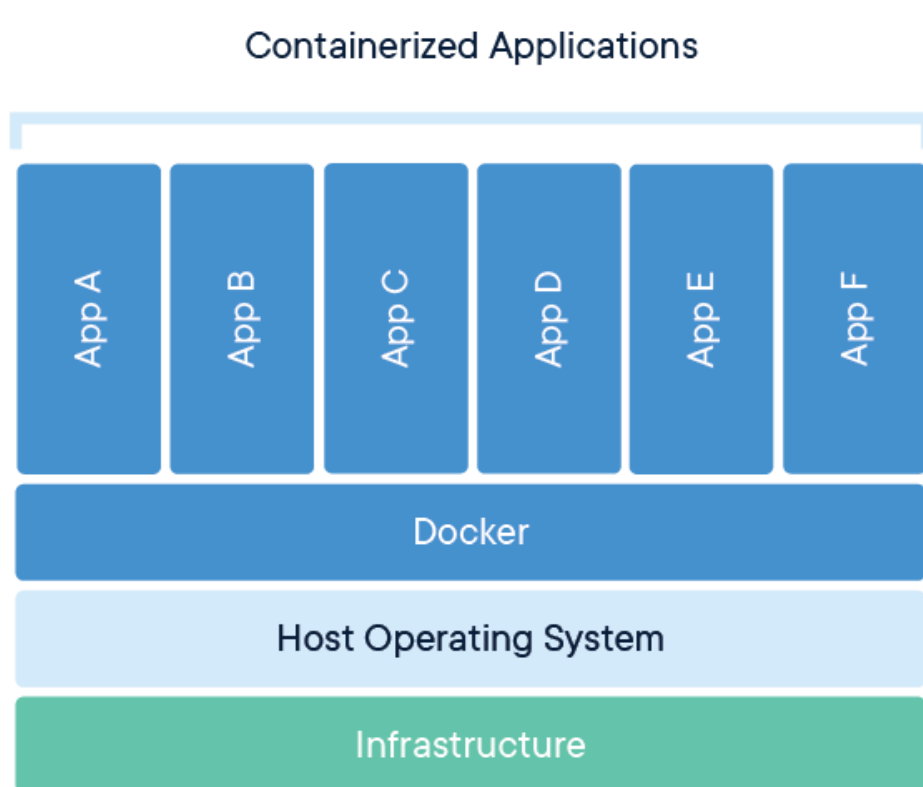
物流コンテナの輸送



アプリケーションをDockerイメージで移動し
Dockerコンテナとして実行

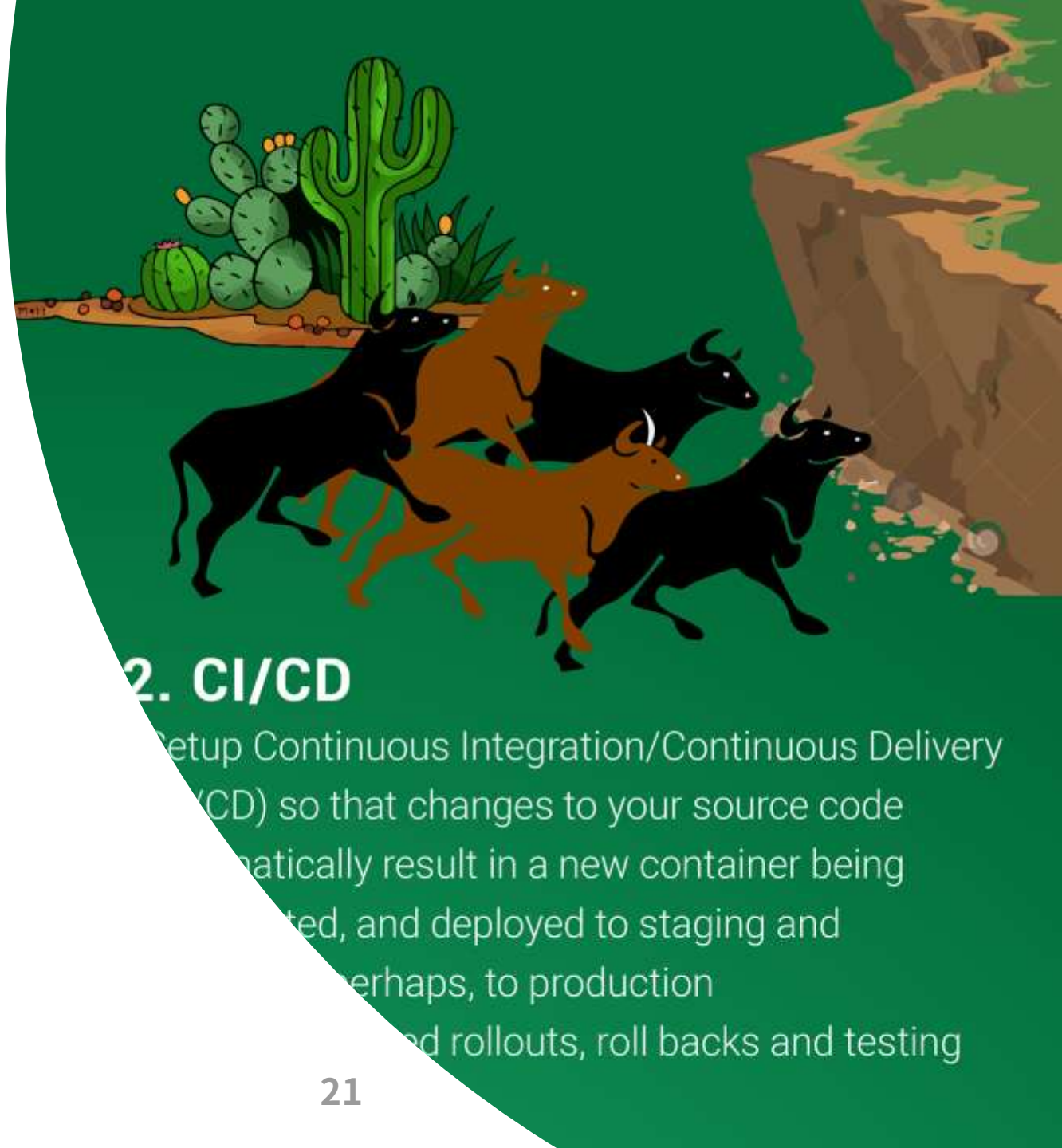
Docker ≠ コンテナ型仮想化

- アプリケーション・コンテナ
- システム・コンテナ(コンテナ型仮想化)



2. CI/CD

- 継続的インテグレーション/継続的デリバリ (CI/CD) をセットアップすると、ソースコードに対する変更の結果、自動的に新しいコンテナが構築、テストされ、定期的にテスト環境に展開するだけでなく、本番環境にすら展開する。
- ロールアウト、ロールバック、テストを自動的に行うようセットアップする。



2. CI/CD

Setup Continuous Integration/Continuous Delivery (CI/CD) so that changes to your source code automatically result in a new container being built, tested, and deployed to staging and production environments. Perhaps, to production environments. Automated rollouts, roll backs and testing

- コンテナ化

- Docker ... アプリケーションを開発・移動・実行するプラットフォーム
- Kubernetes ... アプリケーションをデプロイ、スケーリング、管理をする

- バージョン管理

- Git ... ソースコードの変更履歴を記録・追跡するバージョン管理システム
- GitHub ... 内部に git を使う、GUI のソフトウェア開発プラットフォーム

- テスト自動化

- Jenkins ... ソフトウェアのビルド、検証、インストールなどを自動化できるツール

3. オーケストレーション

- Kubernetes は業界トップのオーケストレーション・ソリューションです。
- 認証 Kubernetes ディストリビューション、対応 (Hosted) プラットフォーム、インストーラーから選択すべきです。

HESTRATION

is the market-leading orchestration
select a Certified Kubernetes Distr
form, or Installer





アプリケーションやサービスの
オーケストレーション
Orchestration

複数のホスト・システム上を横断するアプリケーションをスケール(拡大・縮小)できる機能
※コンテナに依存しない

設定ファイルをベースに
サービスを定義・維持

- **Kubernetes**
- **Docker Engine (swarm mode) + Docker Compose**
- **Rancher**
- **Nomad**

計算資源の抽象化

(主に(コンテナ)やジョブの)
スケジューリング
Scheduling

- **Marathon, chronos**
- **Docker swarm**
- **Deis**
- **fleet**

ホスト計算資源の
クラスタ管理
Cluster Management

- **Apache Mesos**
- **DCOS (Mesosphere)**



宣言型サービス・モデルのオーケストレーション

Declarative service model

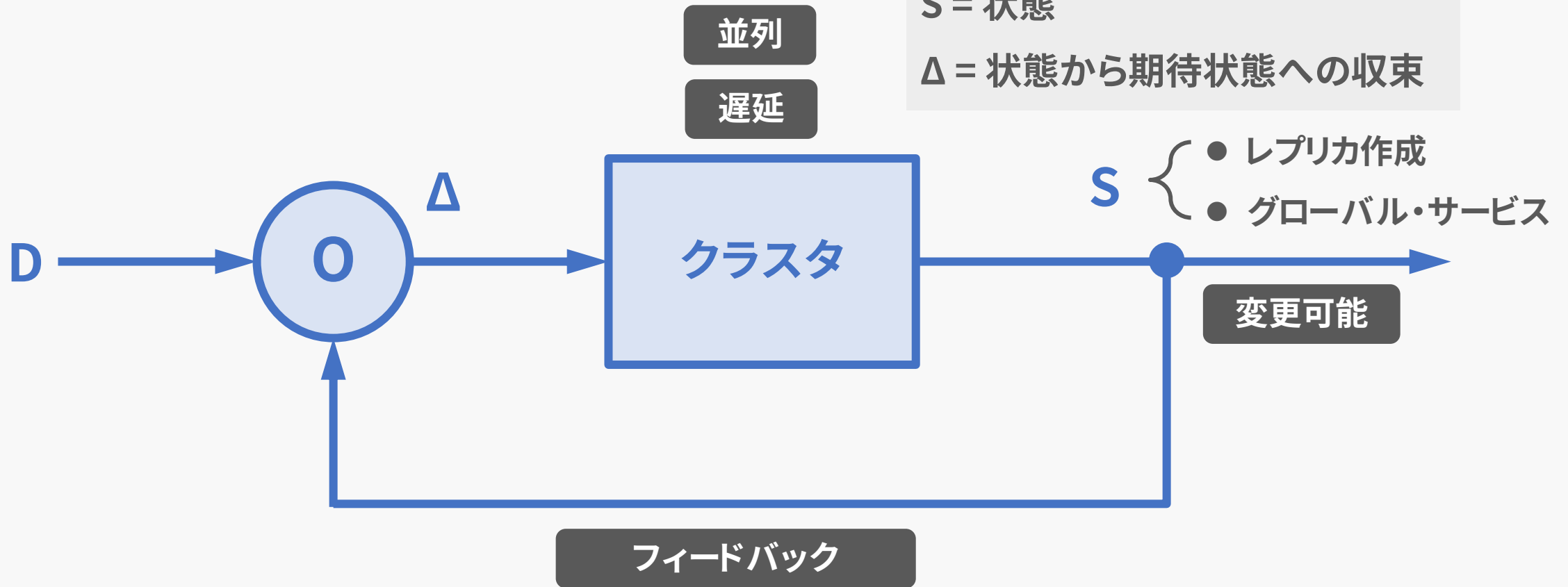
27

D = 期待状態

O = オーケストレータ

S = 状態

Δ = 状態から期待状態への収束





システムの柔軟性が高まる一方、
開発・運用の変化を迫られる。

必要があれば、手法だけでなく、
人や組織(文化)も変える必要がある。



- クラウドコンピューティングの振り返り

1つの巨大なコンピュータに集約される予測(「クラウド化する世界」)は外れ、世界各地のデータセンタやスマートフォンに至るまで処理が分散し、生活に密着した。

- Dockerコンテナ登場から、
Kubernetesオーケストレーションに至る経緯

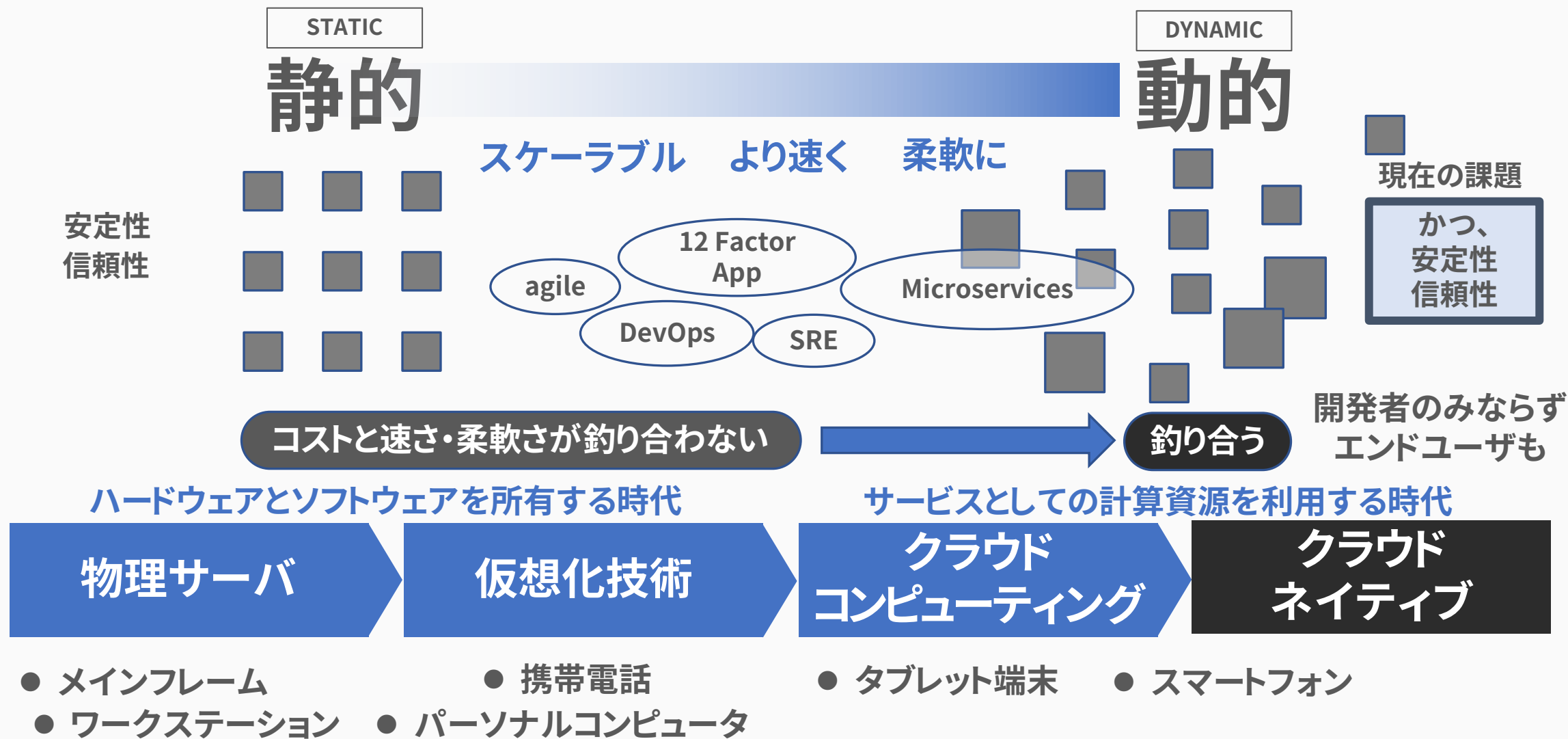
クラウドネイティブに至る流れは、物理→仮想化→クラウドの延長線だが、技術は別。活用には、CNCFのCloud Native Trail Mapにあるように、システムの「コンテナ化」→「CI/CD」→「オーケストレーション」の順番が大事。

- 「コンテナ」とは何か？ システムを作る場合の考慮点

Linuxカーネルの名前空間・cgroupの分離技術を使って、素早い開発・運用を可能に。仮想化ではない。そのまま移行は無理。スケール可能なシステムへの対応が必要。近年は、技術要素よりも、開発文化がネックになりつつある。

システム基盤も、サービス側も変わり続ける前提

31



- 今すぐシステムが必要な場面
- 大規模アクセスが予想されるため、アプリケーションはスケール前提

コンテナ / Docker

仮想化からクラウド・ネイティブへ

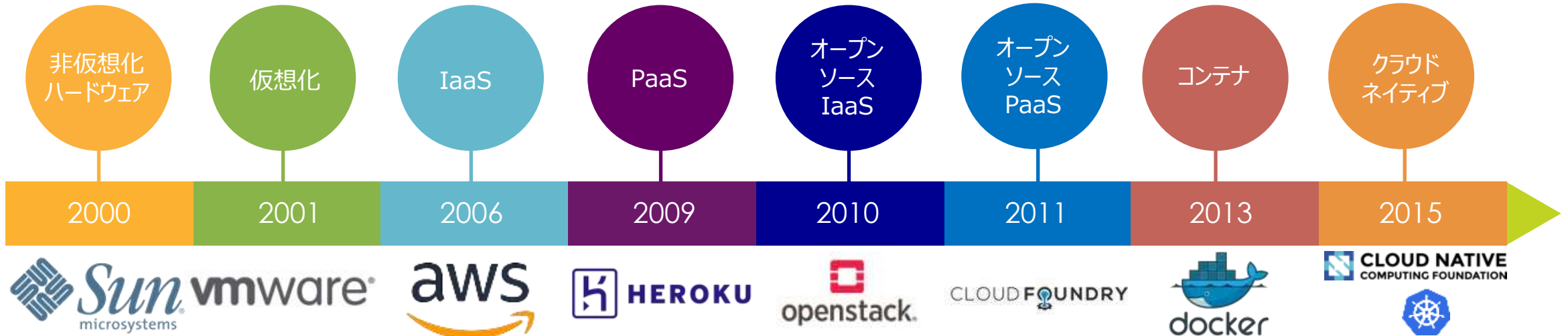
From Virtualization to Cloud Native



kubernetes

・クラウド・ネイティブ・コンピューティングはオープンソースのソフトウェアを積み重ね、次のために用います：

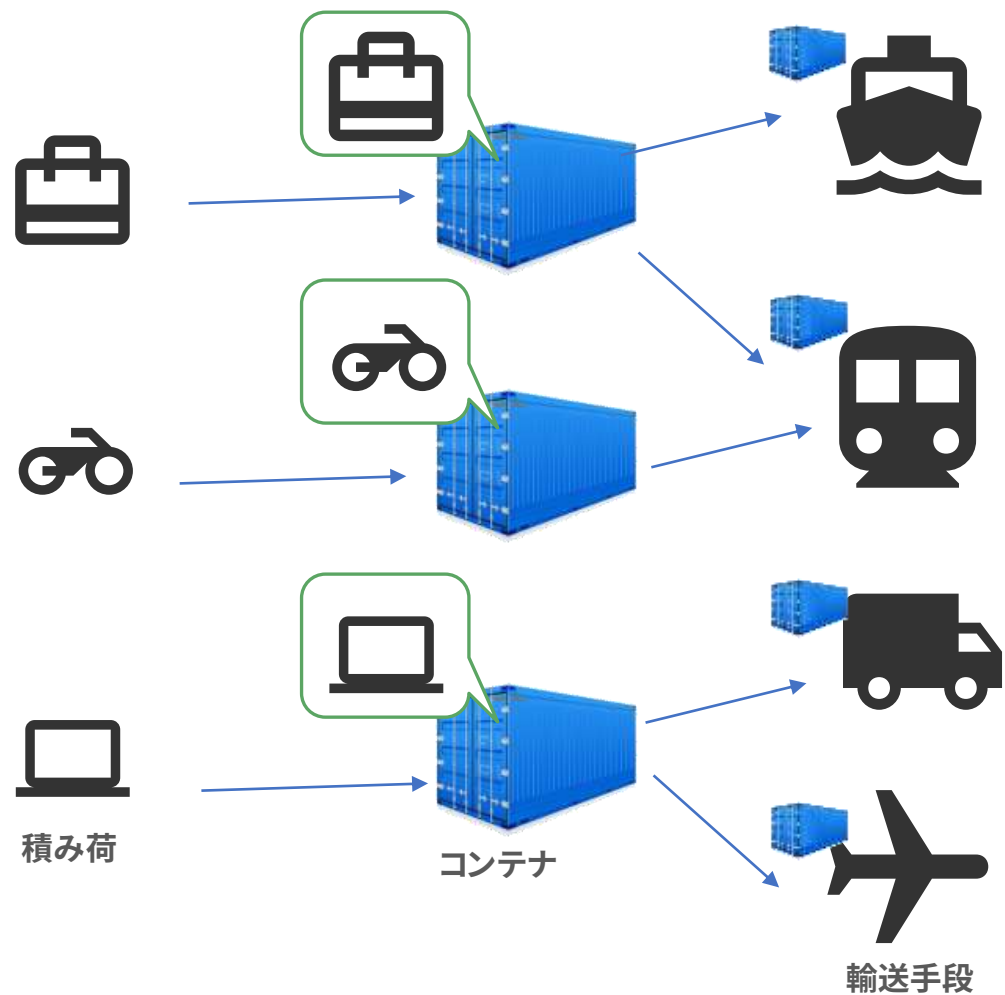
- アプリケーションをマイクロサービス(*microservices*)に分割し、
- 各パーツ自身をコンテナにパッケージし、
- リソース利用を最適化するために、動的に統合/オーケストレーション(*orchestrate*)する



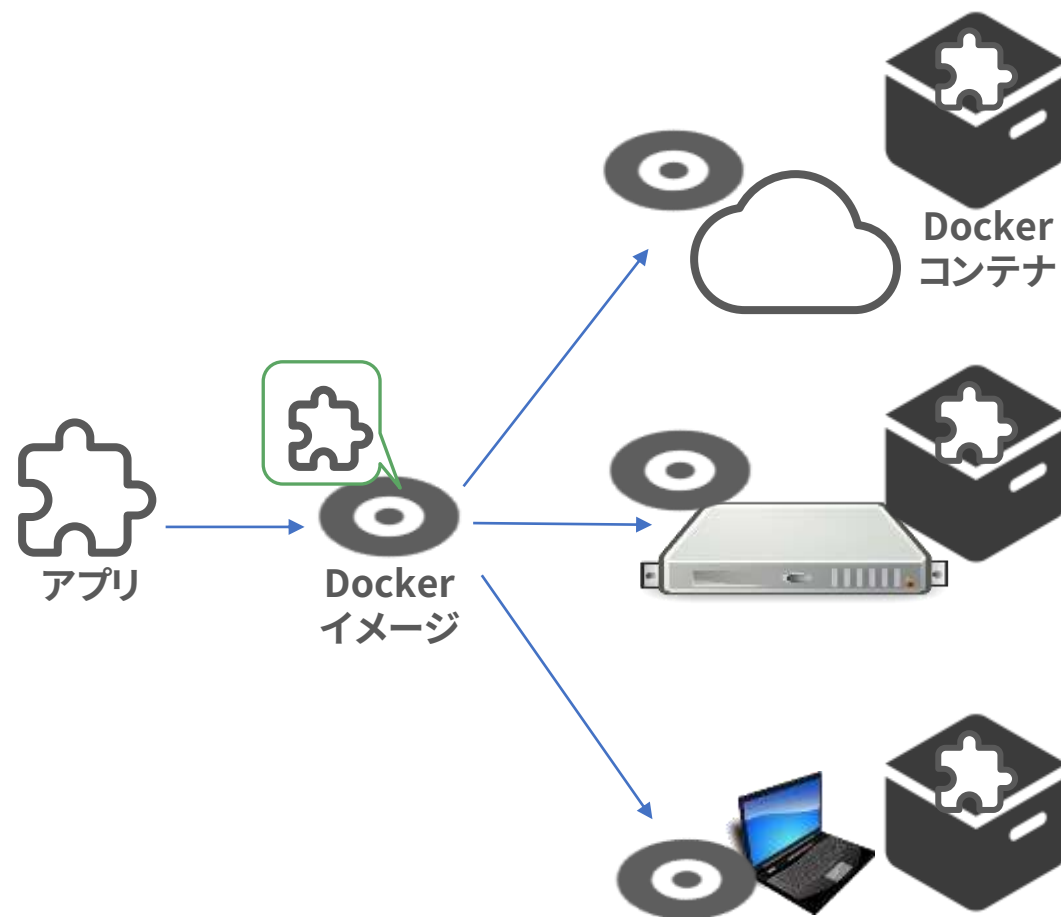
Build, Ship(Share), Run



The future of Linux Containers - YouTube
<https://www.youtube.com/watch?v=wW9CAH9nSLs>



物流コンテナの輸送



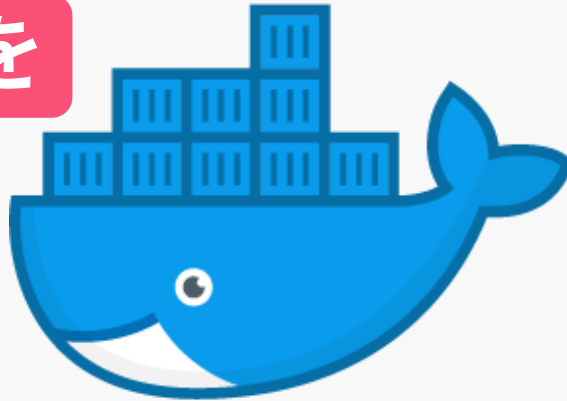
アプリケーションをDockerイメージで移動し
Dockerコンテナとして実行

Docker

Dockerイメージとして

全ての依存関係をパッケージ化して、コンテナとして動かす

Linuxファイルシステムを

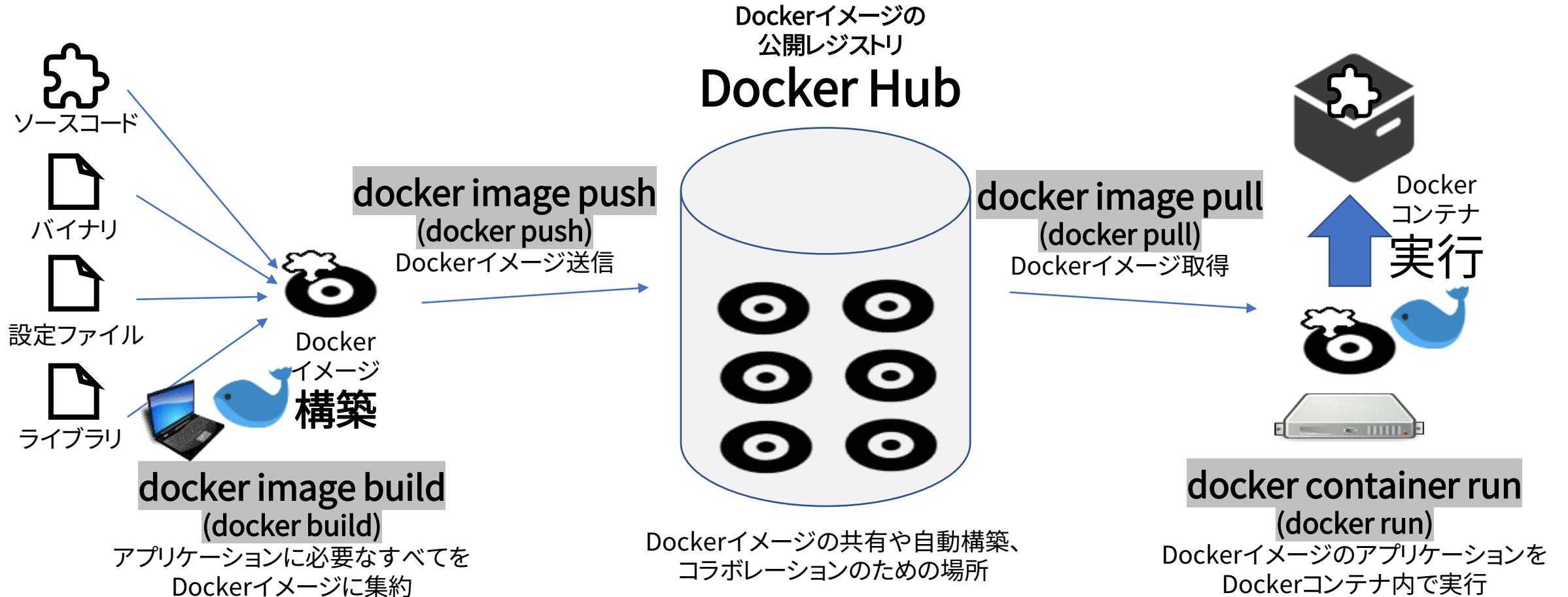


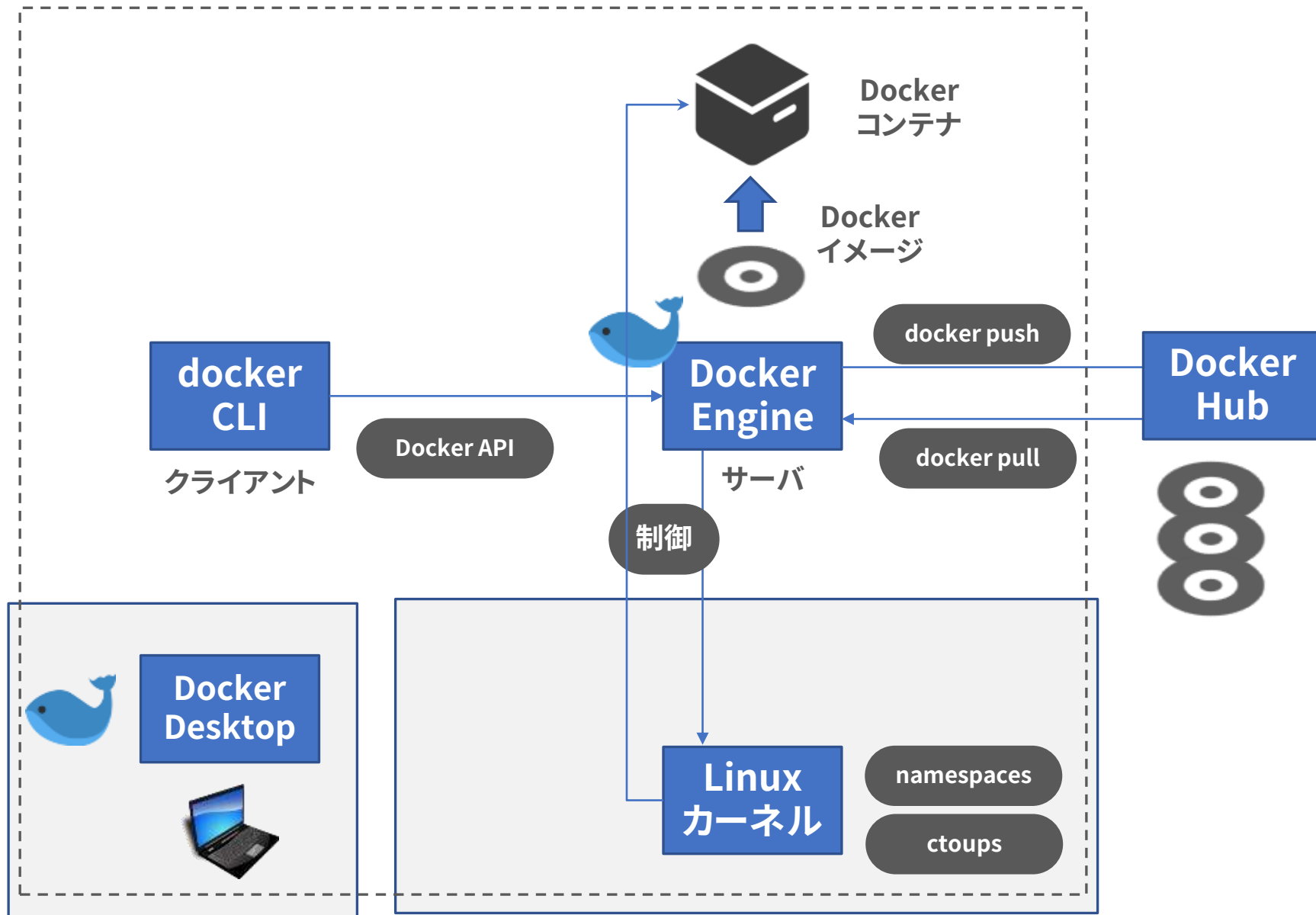
“Docker allows you to package an application
with all of its dependencies into a standardized
unit for software development.”

BUILD (構築)

SHARE (共有)

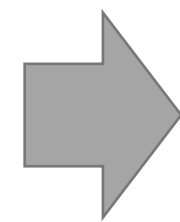
RUN (実行)



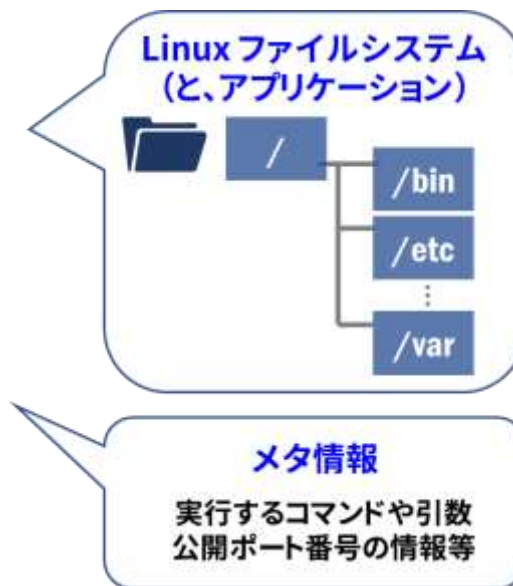
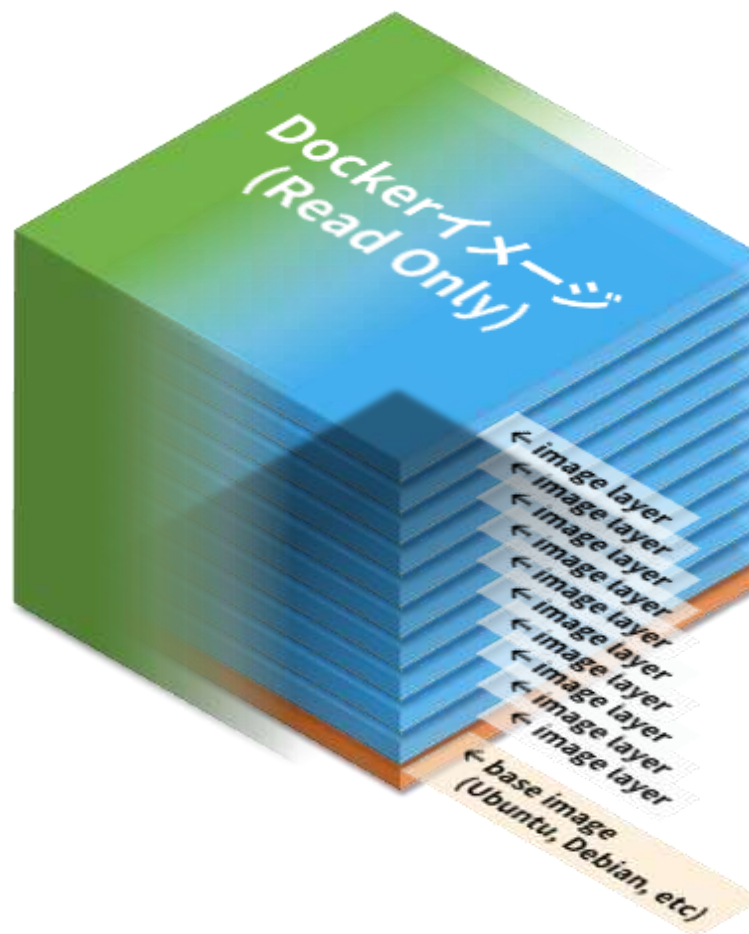




✕ docker~.img

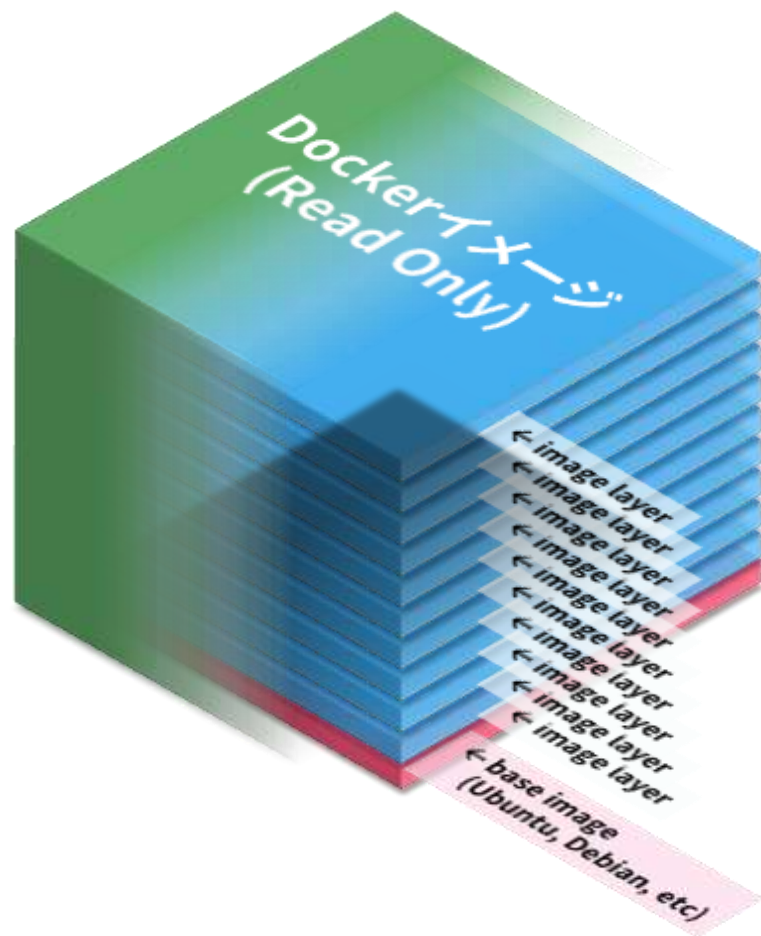


ではなく

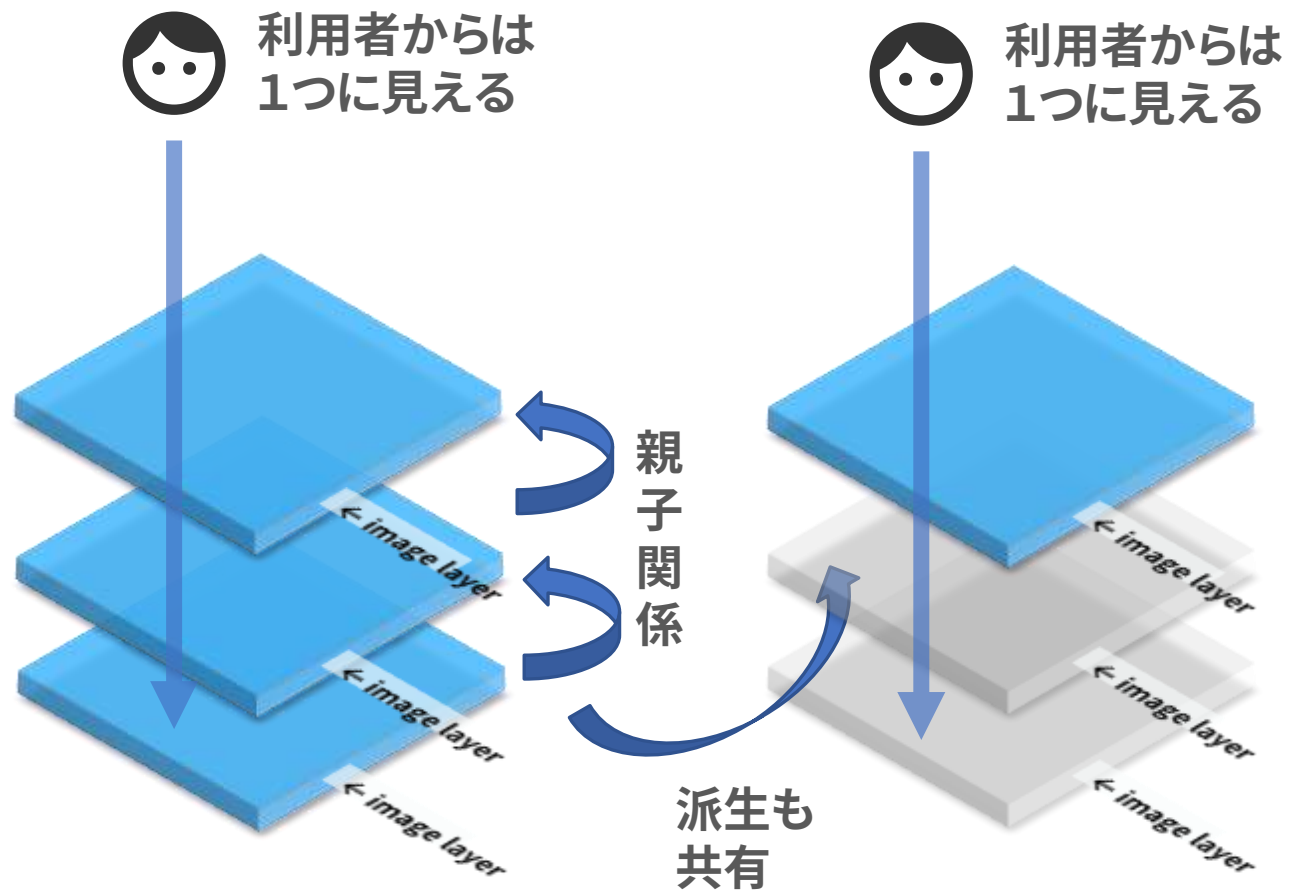


Dockerイメージは「1つのファイル」ではなく「概念」。抽象的なイメージ・レイヤの積み重ね

Dockerイメージはイメージ・レイヤの積み重ね

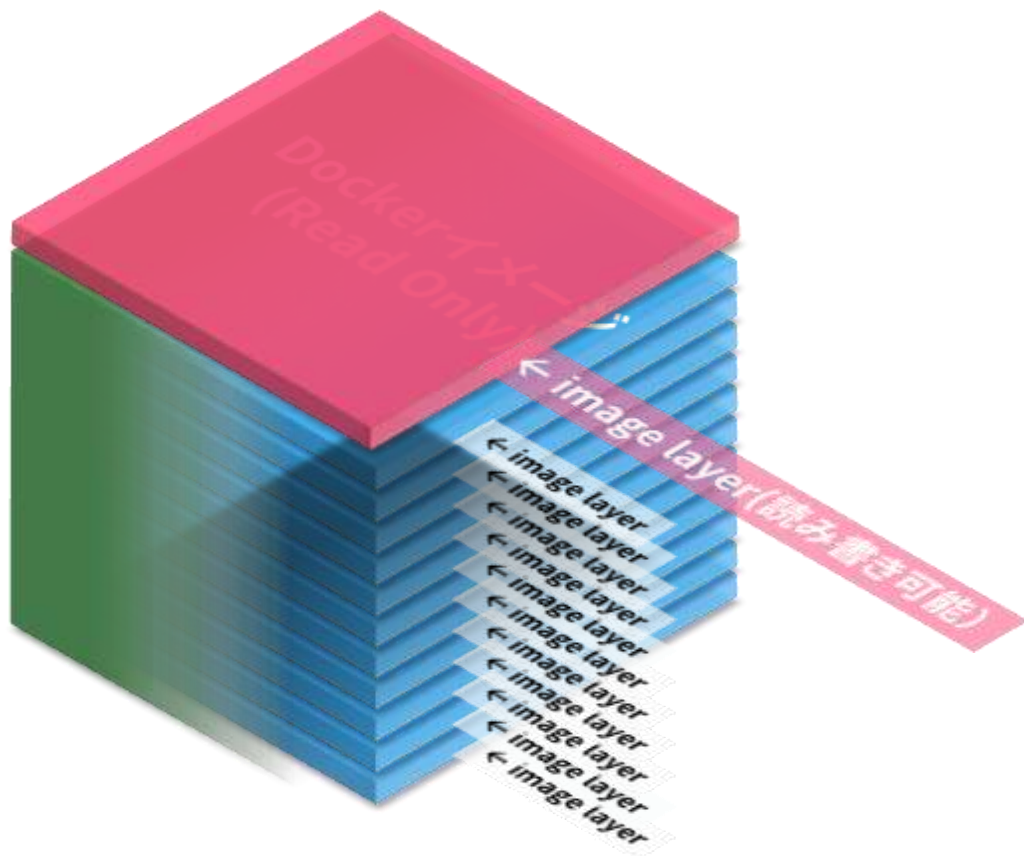


プログラムやライブラリと
メタ情報(実行するプログラムやポートなど)

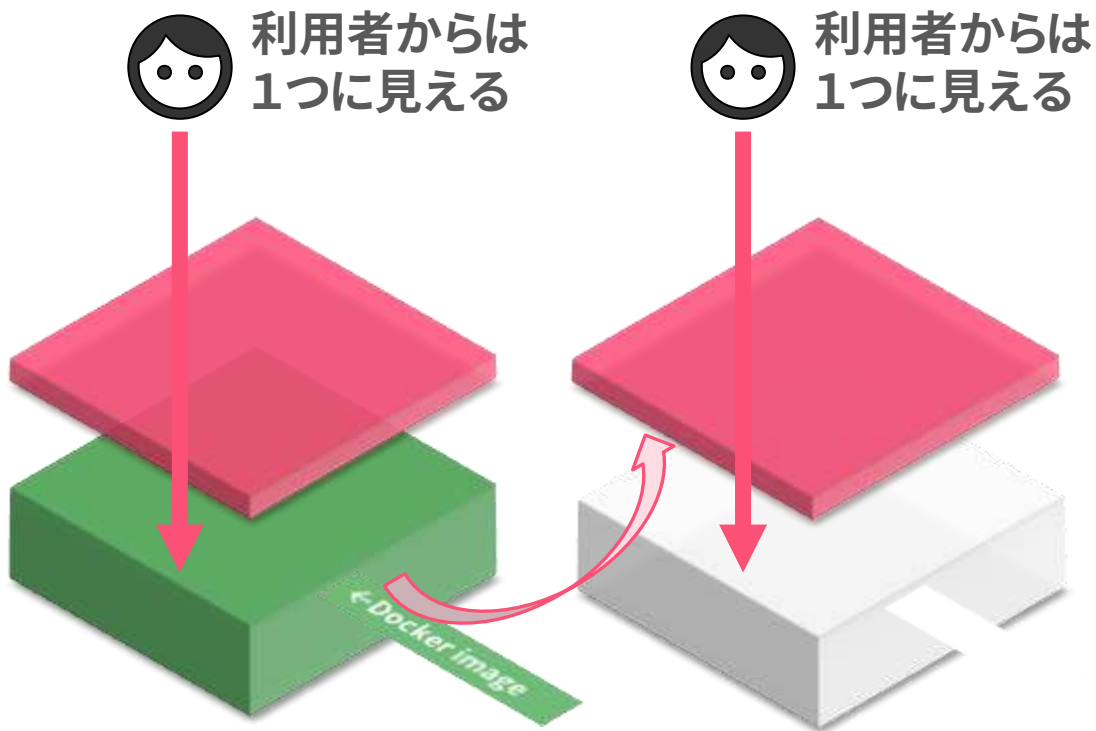


だから高速に移動できる・開発を高速化できる
リソースを有効に使える“lightweight”な性質

Dockerコンテナもイメージ・レイヤを持つ

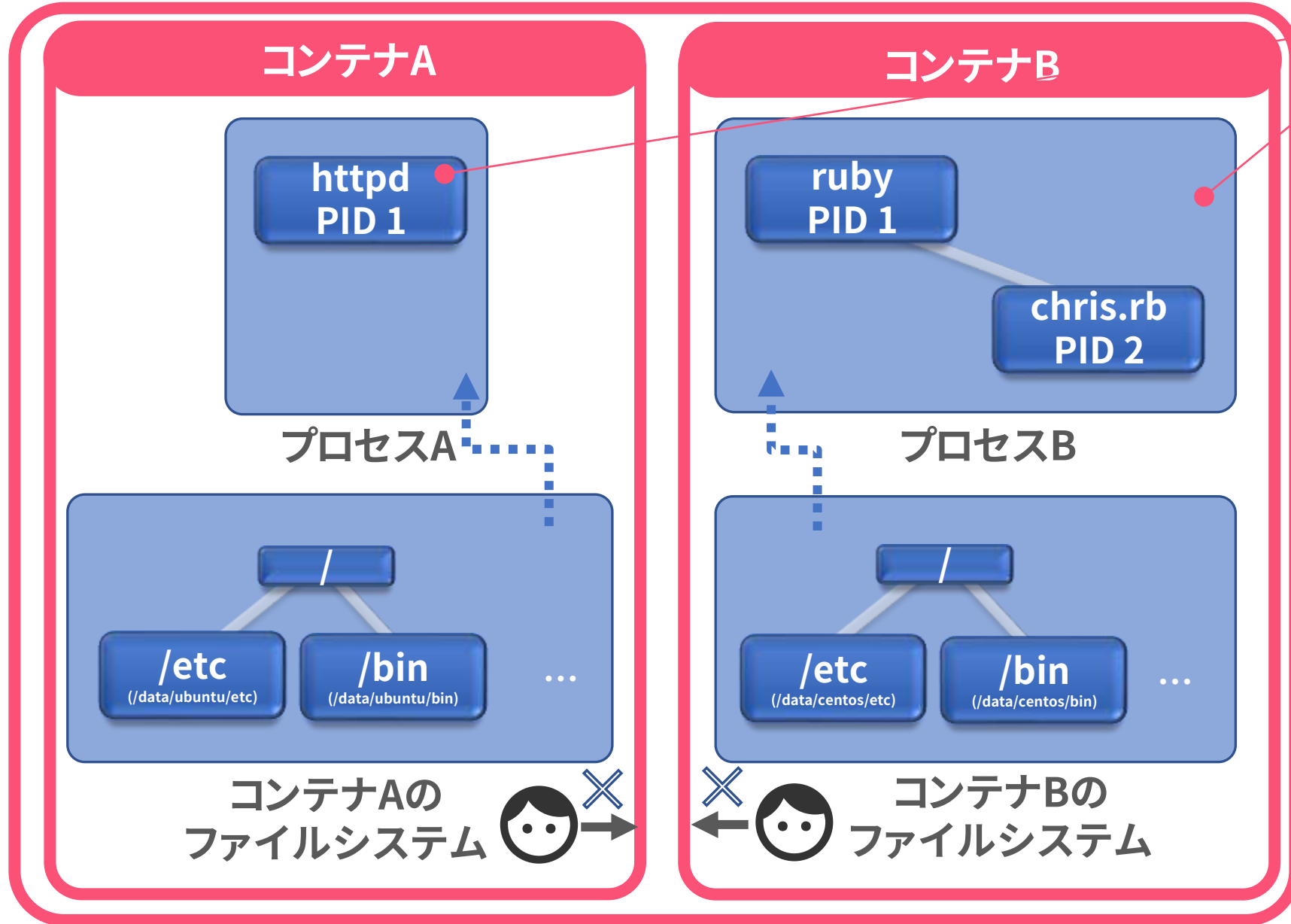


元のレイヤに対する変更情報を記録
Copy on Write の性質



だから高速に移動できる・開発を高速化できる
リソースを有効に使える “lightweight” な性質

コンテナは特別なプロセスの状態

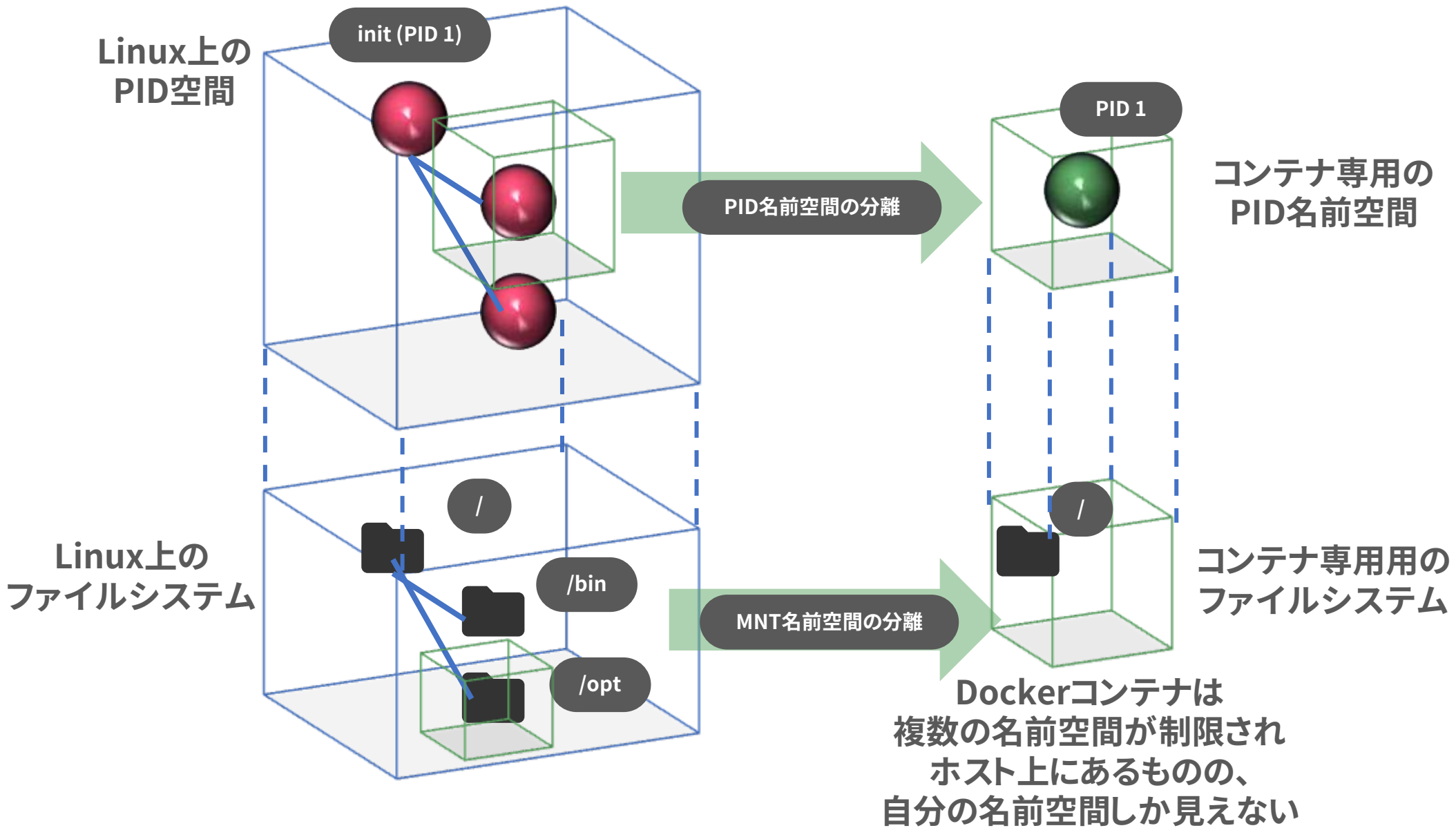


名前空間の isolate

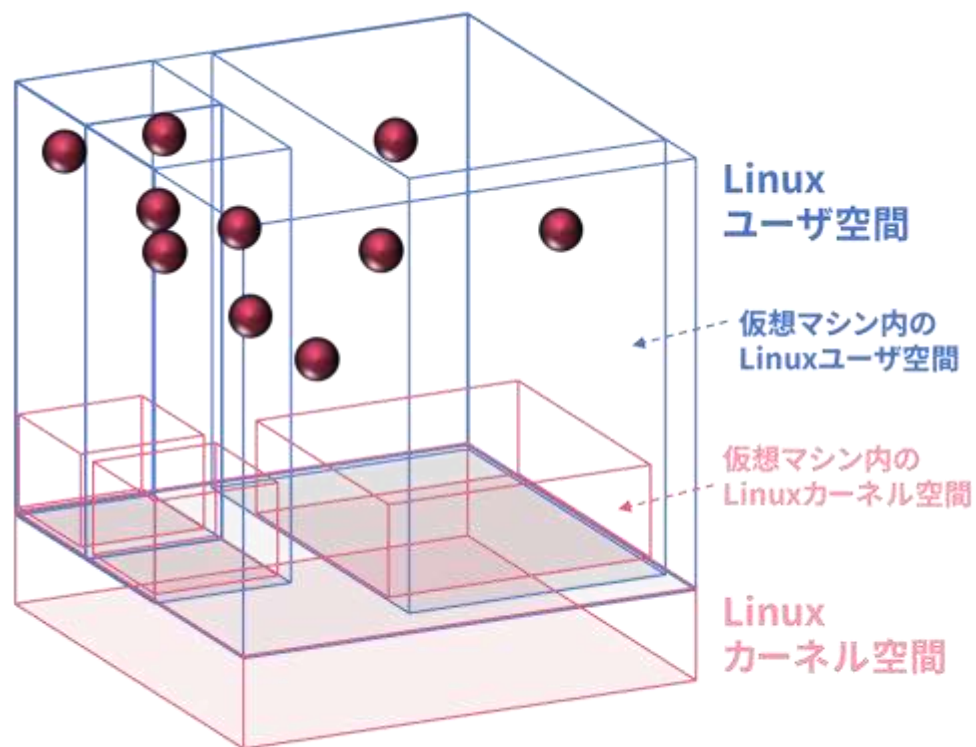
- プロセス
- ファイルシステム
- ネットワーク
- ホスト名
- UID・GID
- プロセス間通信、等

cgroupでリソース制限

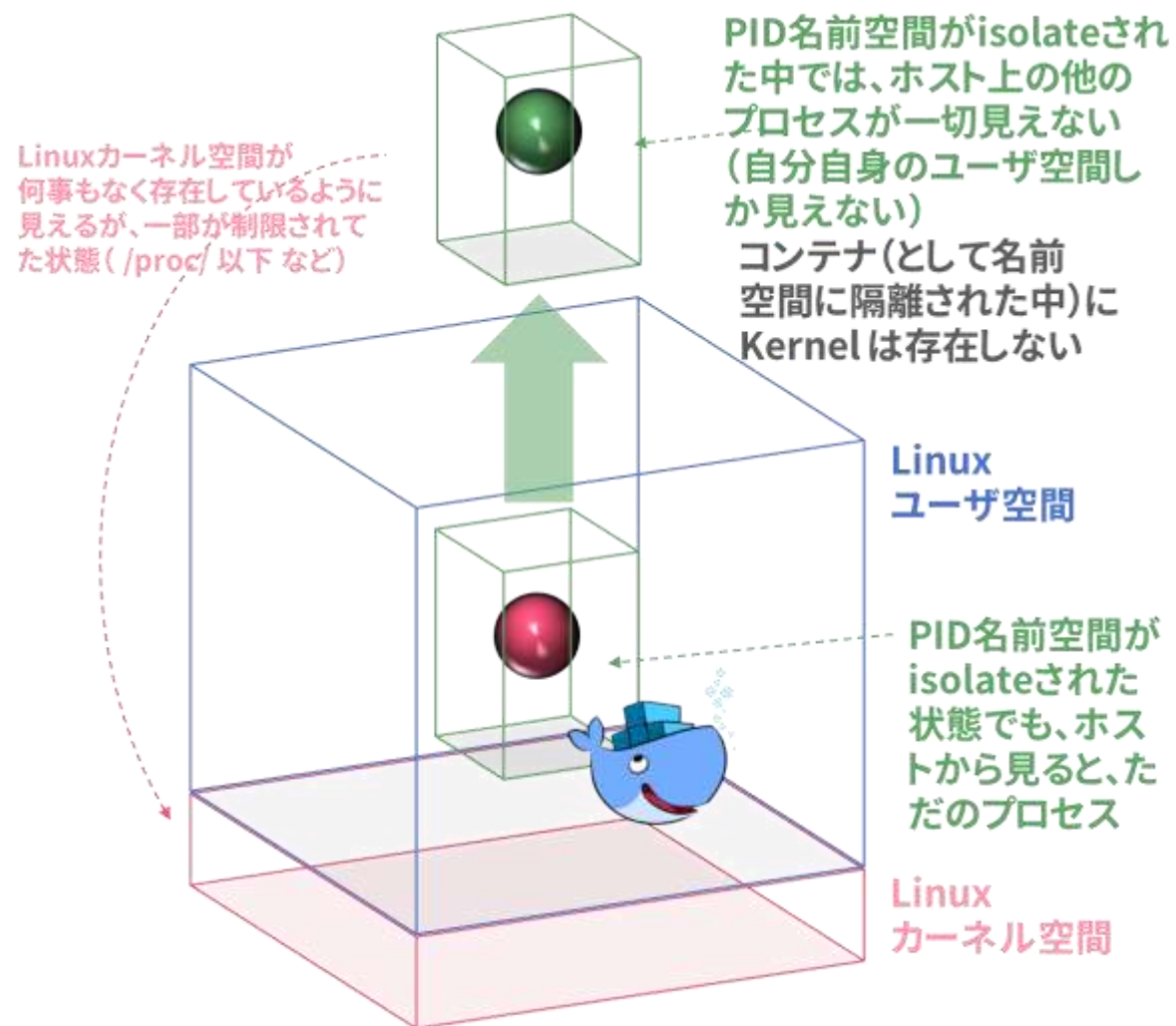
- CPU
- メモリ
- I/O
- ディスク・クォータ、等



Dockerコンテナは「特別な状態」のプロセス



ハードウェアの仮想化とプロセス



Dockerコンテナとプロセス

CentOS 8 の公式イメージを使った Dockerfile 例 46

Dockerfile

```
FROM centos:8
RUN dnf -y install httpd php
ADD https://raw.githubusercontent.com/docker-library/httpd/077141ee37fca63972292c562ec0f632d0f8311/2.4/httpd-foreground
    /usr/local/bin/
RUN chmod 700 /usr/local/bin/httpd-foreground
RUN sed -i -e 's%^#LoadModule mpm_prefork_module
modules/mod_mpm_prefork.so%LoadModule mpm_prefork_module
modules/mod_mpm_prefork.so%' /etc/httpd/conf.modules.d/00-mpm.conf
RUN sed -i -e 's%^LoadModule mpm_event_module
modules/mod_mpm_event.so%#LoadModule mpm_event_module
modules/mod_mpm_event.so%' /etc/httpd/conf.modules.d/00-mpm.conf
EXPOSE 80
COPY ./html/* /var/www/html
CMD ["httpd-foreground"]
```

NGINX

PHP7 の公式イメージを使った Dockerfile 例

47

Dockerfile

```
FROM php:7.2-apache  
COPY ./html/* /var/www/html
```

CentOS 6 の公式イメージを使った Dockerfile 例 48

Dockerfile

```
FROM centos:centos6.10
RUN sed -i
    '/^mirrorlist/s/^/#;/^#baseurl/{s/#//;s/mirror.centos.org/$releasever/vault.centos.org$releasever/6.10/}' /etc/yum.repos.d/*E* && \
    yum install -y epel-release && \
    yum update -y && \
    cp -f /usr/share/zoneinfo/Japan /etc/localtime
RUN yum -y install php httpd
EXPOSE 80
RUN echo '<?php phpinfo(); ?>' > /var/www/html/index.php
ADD https://raw.githubusercontent.com/docker-
library/httpd/077141ee37fca63972292c562ec0f632d0f831b1/2.4/httpd-foreground
/usr/local/bin/
RUN chmod 700 /usr/local/bin/httpd-foreground
CMD ["httpd-foreground"]
```


PHP5 の公式イメージを使った Dockerfile 例

49

Dockerfile

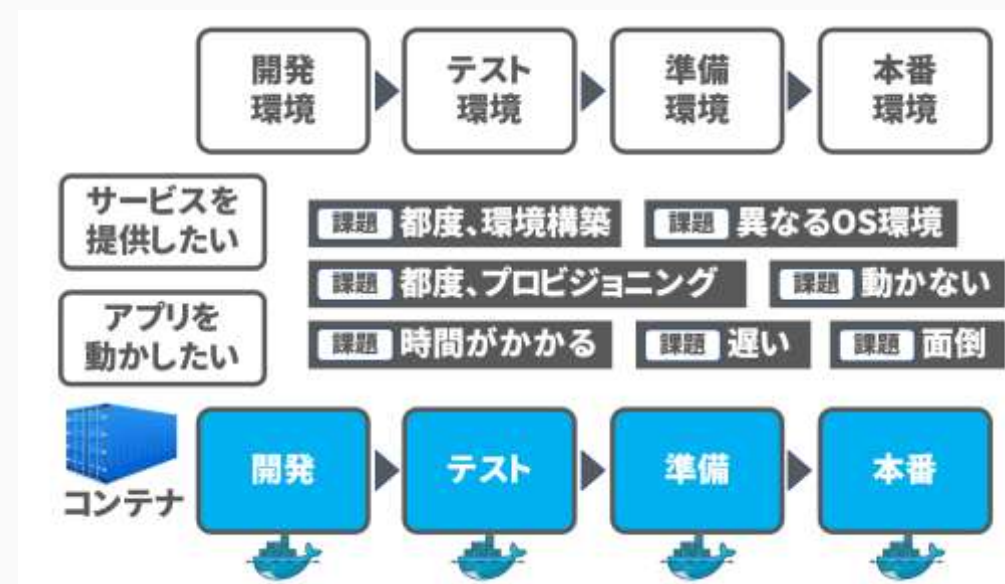
```
FROM php:5.6-apache  
COPY ./html/* /var/www/html
```

- 【最重要】 Docker は「仮想化技術」ではありません
 - 「アプリケーション・コンテナ」と「システム・コンテナ」は考え方が違う
 - 稼働中の環境を、丸っと移行は無理
 - 例: initがない
 - 例: セキュリティ対策や日々の運用をどうするか
- 既存環境をコンテナ移行ではなく、環境再構築検証の用途に
 - 従来の手順書で再現ができるかどうか
 - なければこの機会に手順化
- CloudNative 的な技術習得やチャレンジの機会に
 - いきなり未知のものをコンテナ化して取り組むより、よく知っているもののほうが移行しやすい
 - ただし、コンテナ活用の用途は「アプリケーション・コンテナ」に限るべきであり、無理矢理すべてを「そのまま」コンテナ化すべきという話ではない

“Dockerは銀の弾丸ではない”

ハードウェアの

- 前提として、Dockerは(いわゆる)「仮想化技術」とは異なる思想・技術背景
 - 「コンテナ型仮想化」として表現・比較されるが [要出典]
 - セキュリティ要件によっては、コンテナの利用より仮想化技術を選択すべき
- (特性を理解した上で) 有用な場面もある
 - 技術(再)検証や手順の(再)作成
 - デプロイを素早く行いたい
 - バッチ的な処理
- どうしても使わざるを得ない場合は
 - Docker の基本概念を理解した上で利用する
 - 丸ごと移植ではなく、移行のための一時措置
 - 最新の公式ドキュメントが常に正しい



アプリケーションの“Build, Share, Run”を素早く簡単に



Lab Products

Hacobune (β)

さくらインターネット株式会社

レンタルサーバ	VPS	クラウド	専用サーバ	データセンター	新サービス
 さくらのレンタルサーバ さくらのマネージドサーバ 1台のサーバを複数の契約者で共有または占有することができ、管理はさくらインターネットに任せて使うサービス 1台を共有 1台を占有 	 さくらのVPS 仮想化技術を用い、1台の物理サーバ上に複数の仮想サーバを構築し、仮想専用サーバとして分けた領域の占有サービス	 高性能サーバと拡張性の高いネットワークを圧倒的なコストパフォーマンスで利用できるIaaS型パブリック・クラウド・サービス	 さくらの専用サーバ 高性能で拡張性と信頼性の高いサーバをまるごと独占して利用することができ、自由にカスタマイズして利用可能なサービス 1台～複数台 	 ハウジング リモートハウジング データセンター内にお客様専用のハウジングスペースを確保し、ネットワーク機器やサーバなどの機材を自由に置けるサービス	 日本発のオープン＆フリーなデータプラットフォームです。衛星から取得出来る情報を含め、世界中のあらゆるデータを集積 www.tellusxdp.com/  通信環境とデータの保存や処理システムを一体型で提供するIoTプラットフォーム・サービス https://iot.sakura.ad.jp/  高火力コンピューティング https://www.sakura.ad.jp/koukaryoku/

サービスの主な利用用途

ウェブサイト運営、ブログ、インターネット・メール

ネットビジネス、電子商取引、動画・音楽配信、開発環境

会員制サイト、キャンペーン・サイト

エンタープライズ

SNS、ウェブ・アプリケーション、SaaS、ASP

<https://www.sakura.ad.jp>

さくらインターネット株式会社



データセンター・専用サーバ

ISHIKARI
石狩



さくらインターネット
SAKURA CLOUD



東京ドーム約1個分の敷地面積(51,448m²)
札幌から車で20～30分とアクセスも容易

さくらのクラウドのコンセプト

開発者志向のシンプルなクラウド

IaaS クラウド（サービスとしてのインフラ）基盤を、圧倒的なコストパフォーマンスで提供

高い自由度

高性能サーバーをスケールアウト

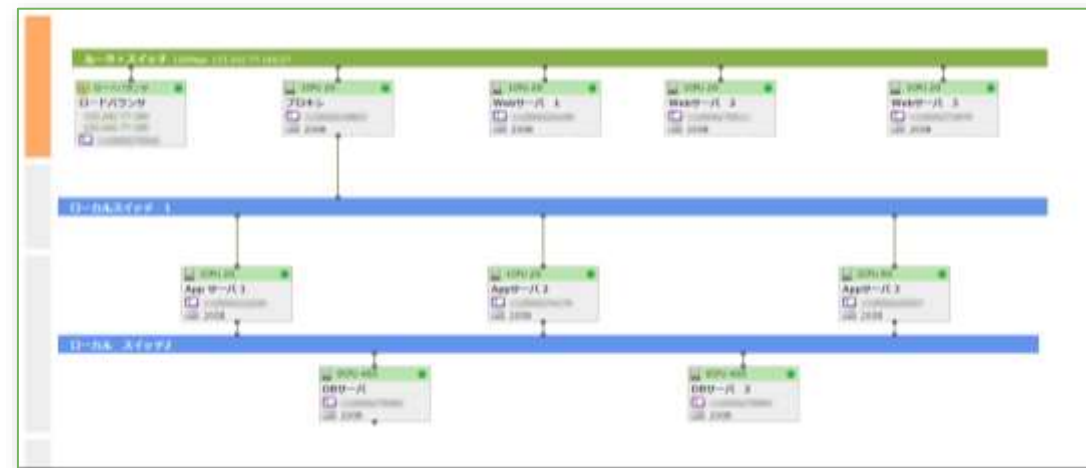
ネットワークも物理環境のように自由に設計・実装できる

ブラウザで仮想データセンターを操作

「サーバ」という概念を大切にしたい



<https://cloud.sakura.ad.jp/>



基本用語と解説

さくらのクラウド

リージョン

さくらのクラウドにおける、データセンターの地理的な単位です。
石狩リージョン（北海道）または東京リージョンを選択できます。

ゾーン

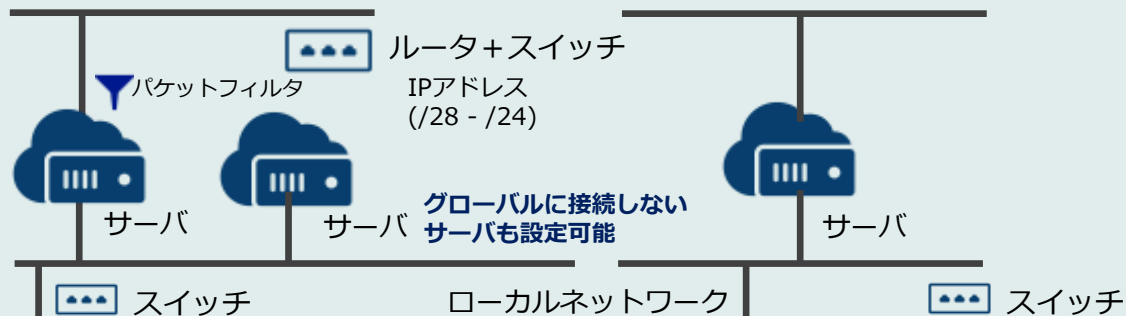
リージョン内にあるネットワーク管理単位であり、各ゾーンは物理的に独立しています。石狩第1ゾーン、石狩第2ゾーン、東京第1ゾーンを選択できます。

専用セグメント

ネットワーク単位でグローバルIPアドレスが付与

共有セグメント

1つのグローバルIPアドレスが付与



オンデマンドで異なるゾーン間やサービス間をローカルネットワーク(L2)で接続

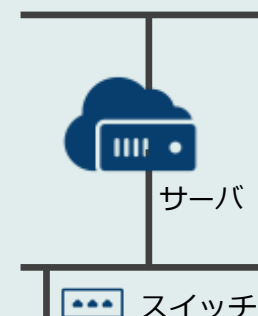
ブリッジ接続

リージョン

複数のリージョンを利用可能

ゾーン

共有セグメント



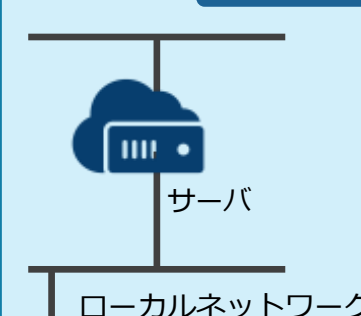
データセンタ

地理的な単位です。専用サーバは石狩(北海道)・東京、ハウジングは東新宿・西新宿・代官山です。

ゾーン

専用グローバルネットワーク

共有ネットワーク



異なるゾーン間やサービス間をローカルネットワーク(L2)で接続。
ブリッジ接続よりも接続可能なサービスが多い。要申請。



企業情報 ニュース IR情報 CSR活動 採用情報

コーポレートサイトTOP > すべてのニュース > お知らせ > インフラを意識せずにSaaS開発～

お知らせ

Tweet

8/12

インフラを意識せずにSaaS開発ができる 次世代PaaS「Hacobune」のオープンβ版を2021年8月12日に無料提供開始 ～8月27日にオンライン発表会を開催～

2021年8月12日

さくらインターネット株式会社は、PaaS型クラウドサービス「Hacobune（はこぶね）」のβ版を、2021年8月12日よりLabプロダクト※1として無料で提供開始します。
また8月27日にこのたびの提供開始を記念して、オンライン発表会を開催いたします。



Hacobune 使い方ガイド

待て見ろ 共有

SAKURA internet | Hacobune 使い方ガイド

見る YouTube

Hacobuneは、当社が「インフラを意識しない世界を実現する」をビジョンに開発したPaaS型クラウドサービスです。スタートアップ企業や少人数でのサービスの開発を行うお客さまなど、スモールスタートでの開発に適しています。Hacobuneを利用することで、インフラの構築が不要となり、お客さまはアプリケーションの開発およびアップデートのみに専念することができ、サービスリリースのサイクルを加速させることが可能となります。



インフラを意識せずにSaaS開発ができる 次世代PaaS「Hacobune」のオープンβ版を2021年8月12日に無料提供開始 ～8月27日にオンライン発表会を開催～ | さくらインターネット

<https://www.sakura.ad.jp/information/announcements/2021/08/12/1968207782/>

- 『小さなチームで始めるサービス開発のための
Web アプリケーションプラットフォーム』
 - 高速にサービス開発からリリースまでのサイクルをまわす仕組みを提供
 - インフラ構築や運用から開発者を解放

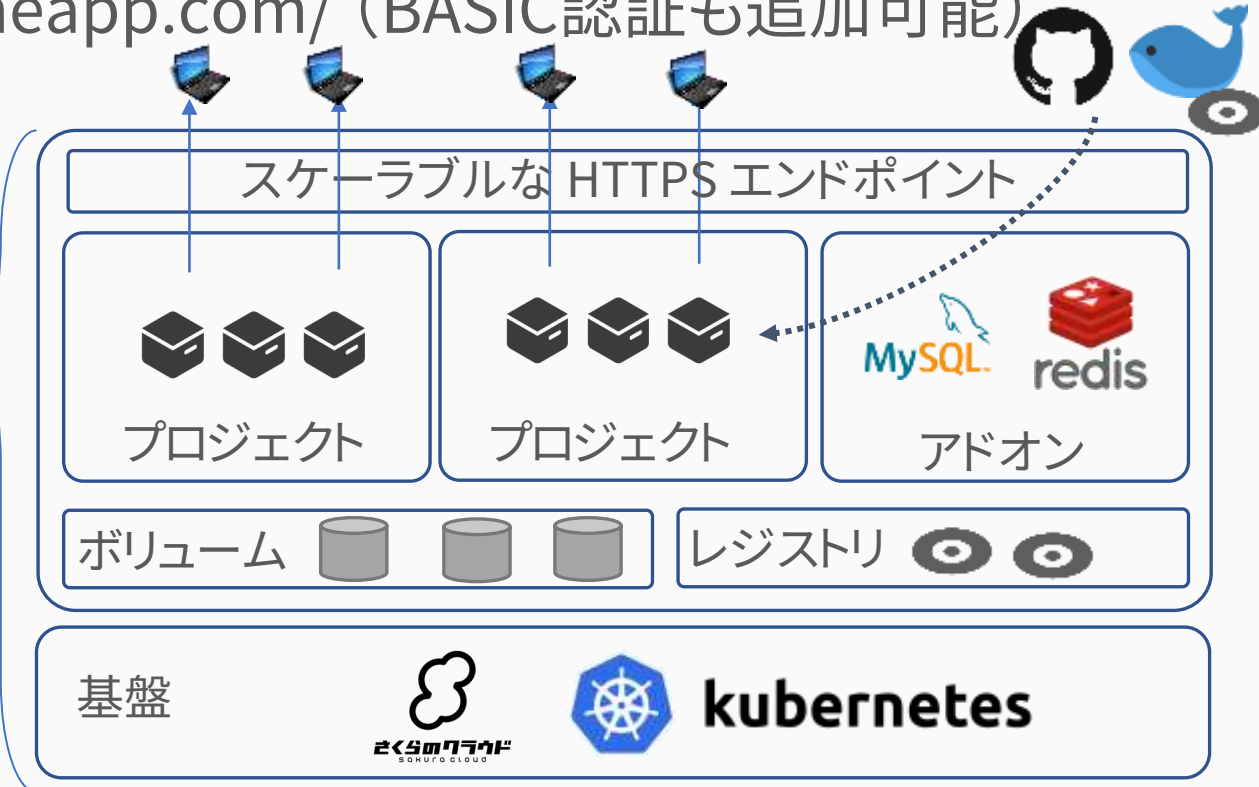
課題例：

- クラウド上にスケール可能なアプリケーションを、高速に開発するには？

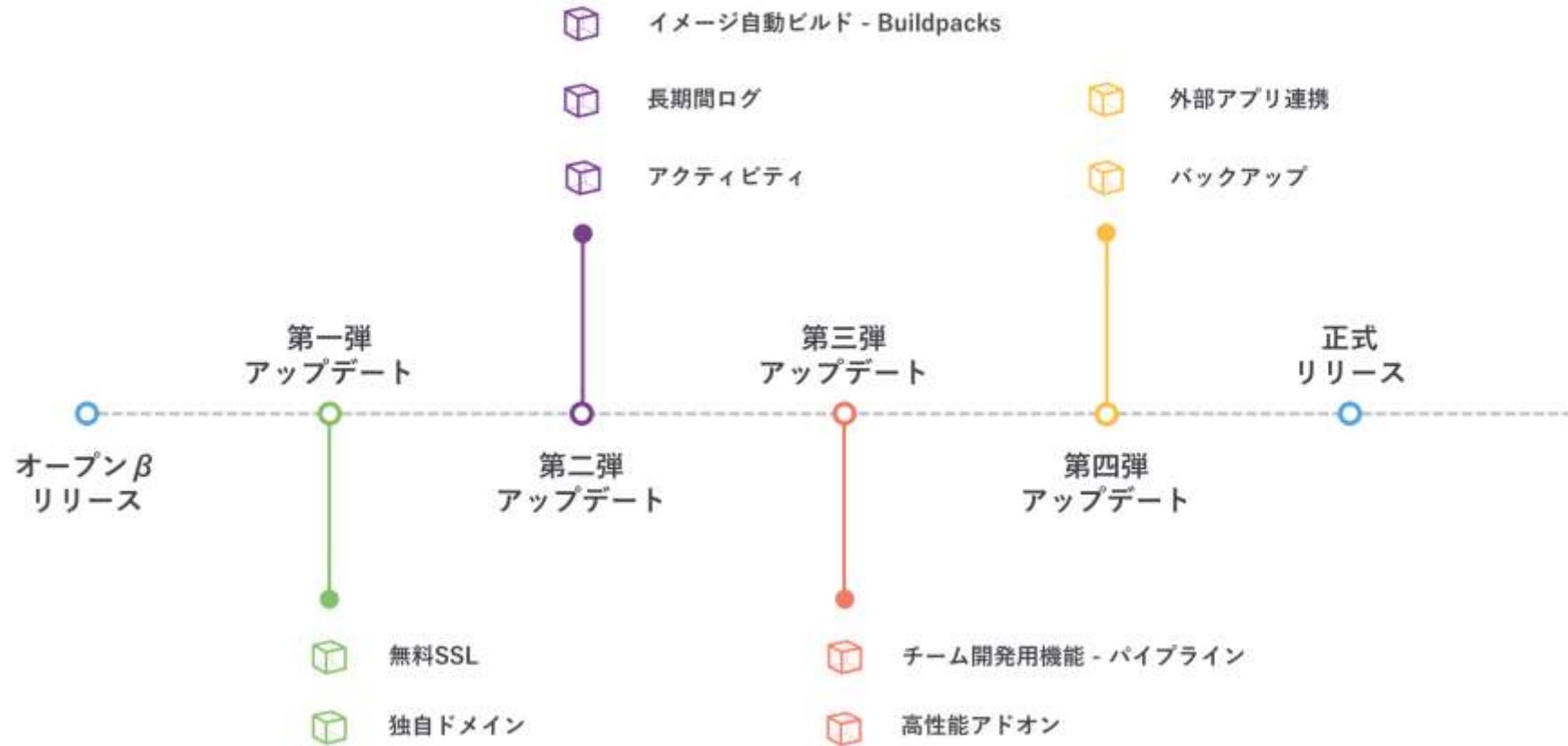


- アプリケーションのデプロイ
 - 作成元は、Docker イメージ、プライベートレジストリ、GitHub リポジトリから選択
 - Web UI からログの参照やモニタリング、再起動など操作可能
 - 公開先は `https://<名前>.c1.hacobuneapp.com/` (BASIC認証も追加可能)
 - ヘルスチェックやオートスケール機能
 - データのボリューム(永続化)を提供
- 付加機能
 - アドオン (MySQL, Redis)
 - ジョブ機能 (cron的な概念)
 - コンテナレジストリ

Hacobune



今後の展望（ロードマップ）



振り返り

仮想化からクラウド・ネイティブへ

From Virtualization to Cloud Native

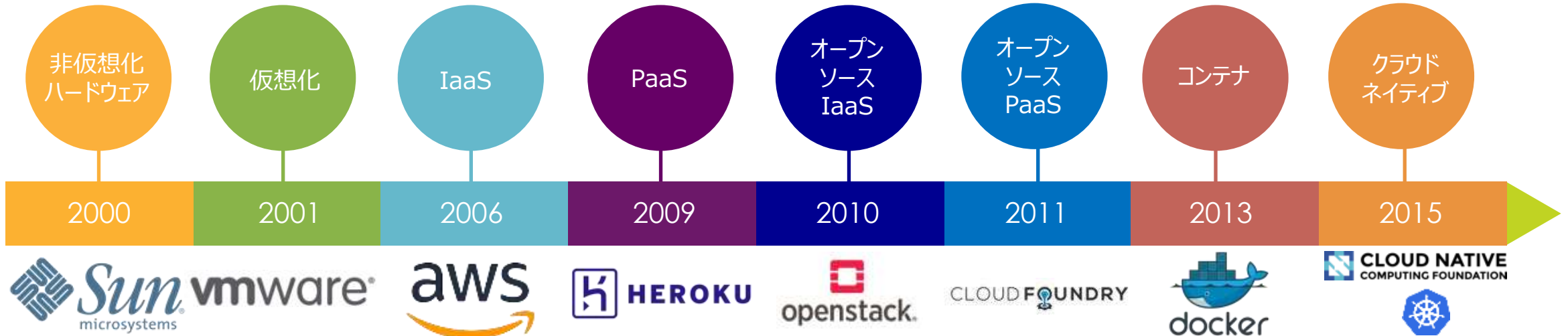


CLOUD NATIVE
COMPUTING FOUNDATION



kubernetes

- ・クラウド・ネイティブ・コンピューティングはオープンソースのソフトウェアを積み重ね、次のために用います：
 - アプリケーションをマイクロサービス(*microservices*)に分割し、
 - 各パーツ自身をコンテナにパッケージし、
 - リソース利用を最適化するために、動的に統合/オーケストレーション(*orchestrate*)する



- クラウドコンピューティングの振り返り

1つの巨大なコンピュータに集約される予測(「クラウド化する世界」)は外れ、世界各地のデータセンタやスマートフォンに至るまで処理が分散し、生活に密着した。

- Dockerコンテナ登場から、
Kubernetesオーケストレーションに至る経緯

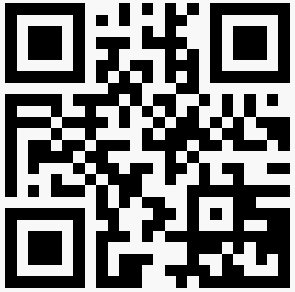
クラウドネイティブに至る流れは、物理→仮想化→クラウドの延長線だが、技術は別。活用には、CNCFのCloud Native Trail Mapにあるように、システムの「コンテナ化」→「CI/CD」→「オーケストレーション」の順番が大事。

- 「コンテナ」とは何か？ システムを作る場合の考慮点

Linuxカーネルの名前空間・cgroupの分離技術を使って、素早い開発・運用を可能に。仮想化ではない。そのまま移行は無理。スケール可能なシステムへの対応が必要。近年は、技術要素よりも、開発文化がネックになりつつある。

ありがとうございました。

facebook.com/zembutsu



m-zembutsu@sakura.ad.jp

